
フリーアの娘

瀬見尾津凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーアの娘

【Nコード】

N6640Y

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

生まれ育った村で平穏に暮らしていた少女ユーティア。ある時、王城より迎えの者がやってきて城へと連れて行かれてしまう。話によると、ユーティアは世界を創造した最高神をその身に宿しているらしい。信じがたい現実に抵抗したくなるユーティアだが、遠距離恋愛をしていた彼氏との再会もあり、城で暮らしていくことになり――。最高神を狙う闇魔法と四人の特別神衛部隊、そしてその間に挟まれた少女たちの物語。

プロローグ

視線を集めてしまった少年は、重い溜め息をついた。

「……すみません。でも、本当のことです」

呆れたり、同情したりと、様々な表情が少年へ向けられる。

やがて、リーダーである青年が口を開いた。

「詳しい事情は後で聞くとして、とりあえず話を進めましょう。私が王家に報告をしてきますので、シルフはすぐに空馬車の手配を。出発の前に打ち合わせをするので、終わり次第、本部にて待機して下さい」

「はい」

シルフと呼ばれた青年は返事をする、中央にいた少女をちらつと見やってから、足早に部屋を出て行った。

「ダリウスは侍女に話をして、迎え入れる準備をお願いします」

「了解」

と、茶髪の青年が部屋を出て行き、彼はその場に残った少年を見つめる。

「あなたは……」

ほんの少しためらった後、彼は言った。

「ミス・オードのお見送りをお願いします。その後は、本部へ戻って待機して下さい」

「……はい」

両目を閉じて呼吸をする。少年は気を取り直すと、少女のそばへ寄った。

「途中までお送りいたします」

「ありがとう」

その様子を見た青年は二人へ背を向け、廊下へ飛び出していった。

第一章 最高神の宿り主

愛するギユスター様へ

まず最初に謝ります、返信が遅れてしまつてごめんなさい。流行り病がとうとうこの村にもやってきて、村全体で大騒ぎになつていたんです。わたしはかろうじて病にかからずにすんだのだけれど、まだ気が抜けません。都会の方はもう大丈夫ですか？

特別部隊に配属されたということですが、どんなお仕事をしているんですか？ 毎日大変な仕事ばかりで体調を崩したりはしてませんか？ あなたのことから大丈夫だとは思うのですが、やはり心配です。あまり無理はなさらないで下さい。

話は変わりますが、つい先日、村の広場に立つ桜が立派な花を咲かせました。ようやくこの村にも春が来た、という感じです。今年もまた村のみんなでパーティーをすることが決まり、わたしも手伝うことになりました。今からとても楽しみです。

他にも伝えたいことはたくさんありますが、そろそろ終わりにしたいと思います。それにあなたの事を考えると、なかなか筆が動いてくれなくなるので。……遠距離はやっぱり、辛いです。

あなたが今日も健康で過ごせますように。 アルグレーン村のユーティアより

* * *

「ユーティアお姉ちゃん、おはよう！」

と、後方から走ってきた少女が声をかけてきた。配達を終えてのんびり帰路に着いていたユーティアは、にっこりと彼女へ微笑み返す。

「おはよう、ヴィアンシュ」

ヴィアンシュと呼ばれた少女は、笑顔でユーティアを見上げた。

「今日のパンもおいしかったよ」

「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいわ」

二人の会話は数年前から習慣になっていた。村はずれに住むヴィアンシュは、配達帰りのユーティアと毎朝顔を合わせる。そのおかげで、二人は姉妹のように仲が良かった。

「それじゃあ、いつてきまーす！」

と、ヴィアンシュが元氣よく学校へ向かって走り出す。ユーティアは「いつてらっしゃい」と、いつものように見送った。

広大な面積を誇るミッドガルド王国の東に位置するアルグレーン村は、とても穏やかなところだった。人口が少ない為に村人全てがつながりを持っており、日常生活を送るのに必要なことは全て村の中で済ませられる。時折、都会から療養のために村を訪れる貴族もいたが、村の人々は差別することなく受け入れてきた。そのおかげで移り住む者も少なくなかったが、その反面、若者の多くが都会へ出てしまっていた。

そんな中、今年で十七になるユーティアはパン屋の娘として両親の仕事を手伝っていた。朝は焼きたてのパンを配達し、昼間は店番をし、夕方になるとまた配達へ出る。それが彼女の生活だった。

「ありがとうございましたー」

店の奥で父がパンを作り、ユーティアは一人店番に立っていた。太陽の高くなつた昼間、店に訪れる客はもっぱら隣町や隣村の人々だ。

ユーティアはカウンター脇の椅子へ腰を下ろし、それまで読んでいた本の続きに目を向ける。――滅多に村の外へ出ないユーティアにとって、読書は旅行のようなものだった。自分の知らない場所や物、それらに関する知識を本から得るのが好きだった。たまには村の外へ出たいと思うこともあるが、家業のパン屋をユーティアは愛していた。

ふいに外で騒がしい音がし、ユーティアは顔を上げた。

「大変だよ、ユーティアお姉ちゃん！」

「何か変な人が来たよ！」

「早くお姉ちゃん、逃げて！」

口々に叫びながら、子どもたちが店内へ入ってくる。その中にはヴィアンシュの姿もあり、ユーティアは本にしおりを挟むとカウンターの外へ出た。

「みんな、落ち着いて。何があつたの？」

少し困り顔で、子どもたちの目線に合わせて腰を屈めるユーティア。すると、一番幼い少女が口を開いた。

「あのね、がっこうからかえろうとしてたら空とぶしろいお馬さんがみえたの」

「それでそのお馬さんがね、村の方に降りてきて」

「そこから怖い人たちが出てきたんだ！」

と、子どもたちは続けた。

「怖い人たち？」

「軍人さんだよ！ ユーティアお姉ちゃんを探してたの」

と、ヴィアンシュが答え、ようやく合点が行く。しかし何故自分を探しているのか、分からなかった。

「それで、その軍人さんは？」

ユーティアがまた問いかけると、ヴィアンシュは言った。

「おばさんが話を聞いてたから、その内に来ると思う」

子どもたちは一様に不安そうな顔をしていた。村の集会に出ていた母が話を聞いているというなら、母から話の詳細が伝わって来るはずだ。

ユーティアはにっこり微笑むと、子どもたちへ言った。

「みんな、そんな顔しないで。きっと悪い話じゃないわ」

「……でも」

と、何か言いたげな顔で見上げた少女の頭を、ユーティアは優しく撫でた。

間もなく店の扉が開き、ユーティアの母親が帰ってくる。

「聞いてユーティア、あなたに用があるそうよ」

一斉にそちらを向くと、母親の後ろには見たことのない青年が立っていた。

くすんだ緑色の軍服にすらりとした長身、一目で分かる育ちの良さ。店の外では部下と見られる軍服の男が二人、待たされていた。

「お初にお目にかかります、あなたがユーティア・サルヴァさんですな？」

ユーティアは屈めていた腰を上げて背筋を正す。

「はい、そうですけど……」

子どもたちは怯え、母が不安そうに様子を見ていた。

彼は苛立たしげな様子で息をつく、ユーティアのそばで片膝を付いた。

「どうか、無礼をお許してください」

と、ユーティアの身に着けた淡い桃色のスカートを一気にめくりあげる。途端にほっそりとした白い脚が露わになると、その場にいた全員が驚きの声を上げた。

びっくりしたユーティアはとっさに悲鳴を上げ、手放されたスカートを両手で押さえる。

「な、ななな、何なんですか！ 何を、な、何の用があつてわたしなんかを！？」

青年は顔を真っ赤にするユーティアに構わず、淡々と用件を告げた。

「あなたを保護させてもらいます。これから私たちと一緒に来ていただけませんか？」

頭の中が真っ白になって状況が理解できない。唇を震わせるばかりのユーティアに青年がまた言う。

「これが正式な国王からの指令書です」

そして見せられた紙切れに、思いがけず視線をそらせなくなった。——それは初めて目にする代物だったが、国王の命令が下りているのに逆らうことは許されない。

「……わ、分かりました」

自分の知らないところで自分が何かに巻き込まれていると知って、ユーティアは気分が悪くなった。

自室で荷物をまとめていたユーティアは、先ほどの事を思い出して複雑な気分になっていた。女性が人前で必要以上に肌を晒すのは恥ずかしいことだった。異性の前であれば、なおさら恥である。

洋服を詰め終わると、ふと机の上に置いた木箱に目が行った。おもむろに両手を伸ばして箱を近くへ寄せる。そつと蓋を開ければ、この二年間で溜まった手紙の山が視界を埋めた。――それは王都イザヴェルで軍隊に所属している恋人からのものだった。もしかすると久しぶりに恋人と会えるかもしれない。そうユーティアは期待するが、それでもあまり気分は変わらなかった。

「……鞆に入るかな」

ユーティアは手紙をいくつか取り出して鞆の中へ入れようと試みたが、それだけの余裕はもうないようだった。最低限必要な物を入れただけなのに布製の鞆はすっかり膨れている。

溜め息について手紙を木箱へしまふ。――どうせ用が終われば故郷へ帰してもらえらるだろうし、わざわざ持つていくこともないだろう。

身だしなみを整えて居間へ降りると、両親が暗い顔をしていた。店はすでに閉店したらしい。

「もう支度は済んだの？ 都会へ行くんだから、ちゃんとお行儀良くするのよ。それと、あまり人様に迷惑かけないようにね」

母はそう言つてユーティアの服装を整えてやる。

「大丈夫よ、そんなに心配しないで」

と、ユーティアは鞆を肩にかけなおした。椅子に座っていた父がこちらに視線を向け、につこりと笑う。

「何があつても自信を失くすんじゃないぞ。もう子どもじゃないんだから、しっかりな」

「さあ、もう行きなさい。村の外で待っている兵士さんたちを、こ

れ以上待たせるわけには行かないでしょう」

親元を離れるのはユーティアにとってこれが初めての事だった。この村で生まれ育ち、遠出する時はいつも家族と一緒にだった。

「うん、ありがとう。それじゃあ行ってきます」

と、ユーティアは玄関の扉を開けた。――不安や心配はあるけれど、行かなくてはいけない場所があるのだから行くしかない。わたしは大丈夫なもの。

家を出て歩き始めると、噂を聞きつけた村の人々が口々に声をかけてきた。ユーティアはいつものように笑顔で彼らに応えながら、村の外にある馬車を目指して進む。

目的地が目と鼻の先になったところで、ふと背後から声がした。

「ユーティアお姉ちゃん！」

振り返ると、今にも泣き出しそうなヴィアンシュがいた。どうやら走ってきたらしく、息を切らしながらこちらを見つめている。

「これ、あげる」

と、ヴィアンシュは右手に握ったものをユーティアへ差し出した。そちらへ手の平を向けると、可愛い木彫りの花のペンダントが手渡された。真ん中にはまった赤い石が沈み行く夕陽に照らされて、きらりと輝く。

「……ありがとう、ヴィアンシュ」

にっこりと微笑んでそう返すと、ヴィアンシュは嬉しそうに泣くような笑顔を見せた。

「早く帰ってきてね、みんな待つてるから」

故郷を離れる事がこれほど辛いものだとは思わなかった。彼女に背を向けて歩き始めたユーティアは、人知れず溜め息を零す。そして再び前を向き、青年たちの待つ馬車へと急いだ。

羽の生えた白馬ペガススが引く馬車に乗り込むと、隣にあの青年が座った。別れの名残を惜んでいたユーティアは、ただヴィアンシュにもらったペンダントを握りしめた。

「故郷を離れるのは寂しいですか？」

ペガススが走り出し、馬車が宙へ浮く。魔法石が車体に取り付けられているのだろうが、それにしては不思議な安定感があつた。

「……はい、ずっとあの村で生まれ育ちましたから」

青年は口を閉ざした。素朴な村娘を連れ出した事に、ようやく後ろめたさを感じたようだ。

「でも、大丈夫です。大事な用があるのでしょう？ それなら仕方のない事です、試練だと思って耐えます」

青年が横目にユーティアを見た。何か考える様子を見せてから、口を開く。

「その事なんですが、詳しくお話ししましょう」

窓の外はもう夜になっていた。ユーティアは青年の声に耳を傾ける。

「先ほどのことですが、あれは、あなたが神の宿り主であることを確認させていただいたのです」

「え？」

首を傾げるユーティアに青年は言う。

「あなたが生まれつき右腿に持っている、その青いあざです。それは伝承どおり、古代文字で【神】【人】【守護】の三つが重なった形をしています」

ユーティアは右腿に触れた。あざのある辺りを服の上から撫でて考える。これが神の宿っている証……？

「この世界に伝わる神話はご存じですか？ 最高神アルファズルが、悪神ローズルにその座を狙われ、女神フリーアの手引きにより逃げ出した、という話です」

「……はい、知ってます」

「アルファズルは女神によって眠らされ、人間界へその魂を落とされました。それ以来、悪神は最高神を狙うのをやめたと言われています。しかし、女神は最高神を護るため、この世界の安定を護るために、今もどこかで私たちを見ていると言います」

幼い頃に本で読んだ記憶がある。ユーティアは神の存在を信じて

いたが、あまりにも現実離れしていて理解が出来なかった。

「最高神の魂は、生と死を繰り返す人間の中を渡り歩いています。何もなければいいのですが、ここ最近、闇魔法を会得する者が何人も逮捕されるようになりました」

「闇魔法って……」

「ええ、百年ほど前に禁忌に指定された魔法です。彼らは何らかの意図を持って行動していると推測されています。それはもしかすると、最高神の宿り主であるあなたに関わる事かも知れません」

ドキッとした。闇魔法が自分を狙っている？ けれども、そんなこと――。

「本当に、わたしなんですか？ 右腿のあざなんて、探せばいくらでもいるでしょう」

「気持ちばかりですが、どうか信じて下さい。あなたこそが、本物の最高神の宿り主なのです」

青年の冷静な黄緑色の目が怖かった。ユーティアは俯いて、唇をぎゅっと結ぶ。

「あなたの中にいる最高神を目覚めさせてしまったら、悪い者たちが次々とアルファズルを狙うでしょう。そうでなくても、最高神の力を欲しがる者は多くいます。この世に目覚めた最高神は、再び世界を創造しなおす可能性だってあります。そうなれば、本当にこの世界は終わってしまうのです」

「――え？」

頭が混乱したユーティアに、青年は淡々と告げた。

「あなたがこの世界の命運を握っている、という事です。あなたの宿している最高神が目覚めたら、何が起こるか分かりません。その目覚めと共に、悪神が再び動き出すことだって考えられます」

信じられなかった。自分が世界にとって大事なものになるだなんて、なんて嫌な夢だろう。ましてや、今の時代、神の姿を見た者は一人もいない。何百年もの間、神々が姿を現していない中、最高神を宿したユーティアが狙われるだなんて。

「闇魔法の勢力についてはまだ調査中ですが、あなたを放っておくことは出来ません。私たちもまだ、混乱しているんです。どうか、事実を受け止めて下さい」

と、青年は言った。

夜空を駆ける馬は速度を増し、星々の下を颯爽と走る。ユーティアは広がる景色に目もくれず、ただ現実と葛藤していた。これからどうなってしまうのだろうか？

「……まだ道のりは長いです。到着は明日の午後になるでしょうから、少し休んではどうですか」

ユーティアの様子に気がついた青年は、そう言って彼女を見た。はっとして顔を上げると、彼の視線にぶつかる。

「ええ、そうですね……。ありがとうございます」

そう返して、ユーティアは楽な姿勢に座りなおすと両目を閉じた。

第二章 特別神衛部隊

ペガススが地に足をつけた時には太陽がほぼ真上に上っていた。

「イザヴェルに着きましたよ。さあ、私についてきてください」

青年の手をとって馬車から降りると変な匂いがした。村ではかいだことのない、都会特有の香りだ。

頑丈そうな石造りの建物が立ち並び、街の中央にはとびきり高い建物が建っている。どこを見ても賑やかな声が聞こえてきて、静かなアルグレーン村とは大違いだと思う。

「ユーティアさん、観光なら後で時間をあげますから、今はちゃんとついて来てください」

と、名前を呼ばれて我に返る。見ると青年は数歩先で自分を待っていた。

「あ、ごめんなさい」

慌てて彼の後ろにつき、魅力的な街とは反対の方向へ進んでいく。整備された道の先には王城が佇んでいた。その荘厳さに、ユーティアは無意識に緊張する。

「ここが都市の名前にもなっているイザヴェル城です。前面に見える南の棟は舞踏会に使われる広間と多くの客室が備えられ、右手の東の棟は軍の本部になっています。左の西棟は国の政治が行われる議事堂を備えており、上階には政治家たち専用の寮もあります。そして一番奥の北の棟は、国の象徴である王族が住む住居になっています」

青年の説明を聞きながら、ユーティアはますます緊張していた。一生見ることがないと思っていた王族の住居がすぐそこに広がっているのだ。どこからともなく好奇心が湧き出てきて、今にもはしやぎだしたくなる。

「城内はとても広く迷いやすいので気をつけてくださいね。棟ごとに柱や廊下の装飾が違うので、自分のいる位置が分からなくなるこ

とはないでしょうが、この城を初めて訪れる者は必ず迷うと言います」

堀の上にかけられた橋を渡り、重々しい城門へ近づいて行く。番をしていた兵士たちは青年の顔を見ると、すぐに城門を開いてくれた。

荘厳な装飾、高い天井から降りるシャンデリア、きらきら光る床と壁と柱と……初めて見る立派な建物に、ユーティアは見入っていた。

「ユーティアさん」

と、再び名前を呼ばれてはつとする。今はそれどころではないと分かっているのに、身体は正直な反応を示していた。

「ごめんなさい……」

つい恥ずかしくなつて自然と顔が俯いてしまった。青年は何も言わず、正面の階段を上り始める。

大理石と思われる階段は高級な雰囲気醸し出していて、一歩踏むたびに何故だかドキドキしてしまう。手すりも同じ石で出来ているらしく、自分がここにいるのは場違いのように感じられた。

階段を上りきり大きな扉を開いて廊下へ出る。落ち着いた赤色を中心とした装飾の数々に見惚れかけたユーティアは、今度は立ち止まらずに歩みを速めた。今は先を急がなければならないのだ。

廊下を左へ行き、途中にあった階段を上へ上がる。道のりは長く、複雑な道順でいくつもの階段と廊下を通ったところで、装飾の色が赤から青へ変わった。先ほどとは違い幾分か派手になっている。――さすが王族、普通とは違うつてことね。

それからまた今度は階段をいくつか下へ降り、廊下の途中にあった扉の前でようやく青年は立ち止まった。

「私の仲間がこの中で待っています。普段は王族専用の会議室なのですが今回は特別に貸していただきました。一応防音壁を備えています。どうか大声を出さないようお願いします」

と、青年は言い、ユーティアはただ頷き返す。大声を出すような

真似は普段の自分でもしないのだけれど、それだけ驚くことが待っているのだろうか？

ユーティアは疑問に思いながらも、ただ青年が扉を叩く音を聞いていた。

最初に見えたのは黒い木の机だった。奥の左側に男性が二人いて、その向かいには銀髪の眼鏡をかけた青年が座っていた。

「おかえりなさい、シルフ」

と、銀髪の彼がこちらを見て口を開き、シルフと呼ばれた青年に促されてユーティアは中へ入る。

左側に座っていた男性の一人は健康的な茶髪で軽そうな雰囲気だ。その奥にいたもう一人には、見覚えがあった。

「……ぎ、ギュスター！？」

その姿に気づいたユーティアは思わず大声を出していた。青い黒髪の彼と目が合い、胸が急に熱くなる。

「だから大声を出すなど……」

シルフの呆れ声にも構わずに、ユーティアはギュスターのそばへ寄って行く。

「まさか、こんなところで会えるなんて！ 何で、どういうこと？ わたし、もう何が何だか分からなくて……っ」

ギュスターは微妙な顔をしながら、今にも飛びついてきそうな彼女へ言う。

「とりあえず落ち着け、ユーティア。詳しいことは後で話すから、今は静かにしててくれ」

「え、あ……ごめんなさい」

と、ユーティアは気を沈ませる。

そんな二人には構わずに、銀髪の彼が口を開く。

「ユーティア・サルヴァさんですね？ まずはこちらにおかけください」

と、勧められたのは中央の椅子で、すぐにユーティアはそこへ腰

を下ろした。

よく見ると室内にいるのは四人の男性たちと自分だけだった。……不思議な感じた。

「すでにシルフから話は聞いたと思いますが、改めて簡単に話をさせてもらいますね。あなたはこの世界を創造した最高神の宿り主であり、闇魔法を使用する者たちが日に日に勢力を増してきています。彼らが神の宿り主であるあなたを狙うのも、時間の問題でしょう。」

そういった事情から、こうしてあなたを保護させていただきました。銀髪の彼は分かりやすい言葉で簡単にそう説明をしてくれた。透き通るような美声のおかげで言葉がすぐ頭に入ってくる。

「闇魔法の勢力が消えてなくなるまで、あなたにはこの城内で生活してもらいます。王家からはすでに許可が下りているので、心配はいりません。そしてあなたに何かあつては困るので、これからは毎日、私たち特別神衛部隊が交代で護衛係を務めさせていただきます」

特別神衛部隊——軍に所属する人間の内、選ばれた者だけで編成された部隊——、そういえばギユスターの手紙に書いてあった名前だとユーティアは思い出す。返信の手紙では勝手なことを書いてしまったけれど、このために作られたものだとなると、何だか申し訳ない気持ちになった。

「申し遅れましたが私はこの部隊の隊長、サジェスライト・ノア・エルフィリッド・アデュートールといいます。短くノアと呼びください」

と、銀髪のノアが自己紹介をすると、その隣に座ったシルフが口を開いた。

「私は副隊長のシルフィネス・ヴァリ・オードです。名乗るのが遅れて、大変申し訳ありませんでした」

そしてギユスターの隣にいる茶髪の青年がにっこりと笑顔を浮かべて発言する。

「私はダリウス・ジエニーウィック・パシェイソンと申します。以後お見知りおきを」

こうきたら、次はギユスターの番である。個人的には深く知った仲であるが、仕事上の都合で改めて名乗らなくてはいけない。

「私はギユスター・フォルセティ・ファールバードと申します」

と、今までとは違った恋人の一面にユーティアは妙な気分になった。その流れを受けて、自分も名乗る。

「ユーティア・サルヴァです。これから、よろしくお願いします」

すると、ギユスター以外の全員が彼女を見て小さく頷いた。みんな良い人そうではあるが、ユーティアは少し不安だった。

「早速部屋へご案内させていただきますが、何か質問はございませんか？」

と、ノーアが問い、ユーティアは遠慮がちに返す。

「わたしはただ保護されているだけなんですか？ 何か、することはないんですか？」

ノーアは言った。

「伝承によると、神の宿り主はいざという時に力を発揮するそうですが、今現在は静かに守られていてくだされば十分です」

彼らの案内で廊下を歩いている途中、ダリウスが話しかけてきた。「どうせ付き合いは長くなるんだから、無理して慣れようとしなくていいよ。聞きたい事があれば何だって答えてあげるし、わがままも少しくらいなら許されるぜ」

雰囲気そのままの軽い調子の台詞にユーティアは困惑してしまう。今までこんな風に優しくされた経験がなかったのだ。

「ダリウス、あんまりユーティアに近寄るな」

と、ギユスターがダリウスを睨みつけ、間に挟まれたユーティアは嬉しいような嬉しくないような気になる。

「分かってるよ、そんなに怖い顔するなって。お前こそ、恋人がそばにいるからって、浮かれて仕事おざなりにするなよな」

前に行くシルフがちらりとこちらを振り返り、ノーアが注意をする。

「ギユスター、ダリウス、お二人とも喧嘩はなさらないでください。ユーティアさんが可哀想ですよ」

ダリウスが口を閉じ、ギユスターはユーティアに小さな声で「ごめん」と、詫びた。

「それにここは王族の住居なんだから、失礼なことはするな」

と、シルフも二人を注意した。彼の第一印象は最悪だったが、意外と礼儀にはうるさい人らしい。

階をひとつ下りたところですぐにその部屋にたどり着いた。上部に横長の四角いガラスのはめ込まれた立派な扉が目印だ。

ノーアが取っ手に手をかけてゆつくりと扉を開く。清潔な白い床と壁が視界に飛び込み、ユーティアは一瞬我を忘れそうになった。

「お待ちしておりました」

室内にいた背の高い侍女がそう言うて頭を下げる。部屋に入ったユーティアは、きよろきよろと周囲を見回すばかりだ。

「彼女はメイリアス・バースン、あなたの身の回りを世話する侍女です」

と、ノーアが彼女を紹介し、ユーティアはメイリアスへ向き直る。「掃除洗濯、何でもいたしますので、御用があれば何なりと申してください」

見たところメイリアスとは年齢が近そうだった。自分と同じ年頃の女性だと分かると、少しだけユーティアは気が楽になる。

「食事は毎回この部屋でおとりください。今日はまだ慣れないでしょうから、ギユスターを護衛係に、明日からこちらの決めた順番で護衛を始めさせていただきます。分からないことがあれば、近くにいる者に尋ねてください構いませんので」

ノーアはそう言うつと扉の方へ戻り、シルフとダリウスと共に礼をした。

「それでは、私たちはここで失礼させていただきます」

と、三人が部屋から出て行く。

残されたユーティアがギユスターに目を向け、侍女のメイリアス

は二人を気にすることなく、ユーティアの荷物を取り上げた。

「お前が神の宿り主だと分かったのは四日前のことなんだ。特別神衛部隊に配属された時はこんなことになるとは思わなかった」

赤い布の敷かれた丸い机を挟み、木製の椅子に腰を下ろして二人は向かい合う。

「じゃあ、これは本当に偶然ってこと？」

「ああ、そうだ。だから正直、俺も戸惑ってる。ユーティアと会えたのは嬉しいが、世界的な危機にお前を巻き込んでしまうのは嫌なんだ。それに、今はまだ確かな情報が少なくて混乱している」

不思議なめぐり合わせにユーティアとギュスターはしばらく黙り込んだ。メイリアスだけが忙しく働いていて、やがて彼女は部屋から出て行った。

「でも、前向きに考えなきゃ。こうして一緒にいられるのは、すごく良いことでしょ？ わたしは嬉しいと思うわ」

不安を心の奥に隠し、ユーティアは微笑んだ。そんな恋人が切なくて、ギュスターは胸を痛めてしまう。

「あまり無理するな、俺の前では素直にして良いんだぞ」

そう返すと、ユーティアの顔がわずかに歪んだ。やはりまだ気持ちの整理が上手くつかなくて不安定になっていたようだ。

「ギュスター、わたし……」

と、涙声が言って半泣きになる。ギュスターは椅子を立つと、ユーティアのそばへ寄ってその華奢な身体を抱きしめた。

「ユーティア」

そのうちに嗚咽する声が室内に響き、しんみりした空気が二人を取り囲む。久しぶりに感じる恋人の温もりに、ユーティアは涙を止めることが出来なくなっていた。

メイリアスが二人分の昼食を運びに部屋へ入ってきた頃には、ユーティアの気分はだいぶ落ち着いていた。

目の前に並べられたのは、美しい食器と見た目にも鮮やかな昼食だった。ユーティアがそれに見惚れている間に、カップに紅茶が注がれて甘い香りが立ち込めた。

「こんな食事、初めて……」

と、ユーティアは呟き、ふと顔を上げて問う。

「ギユスターも、毎日こんな物食べてるの？」

「いや、軍の食事はもう少し格下だ。ここには王家と同じ物が出されているはずだから、国内で最上級の料理、ということになる……」

どうやらギユスターもその豪華さには驚いたらしく、そう言うときこちなく食事を始めた。礼儀作法なんて分からなかったけれど、ユーティアも彼に習って食事に手をかける。

食事の最中は二人とも無言だった。音を立てることは無礼なことであり、貴族の生活に慣れていたギユスターはまだ良かったのだが、地方から出てきたばかりのユーティアは無駄に神経を使っていた。料理の美味さに感動しつつ、気をつけて食べ物を口へ運ぶ。それでも時折音を立ててしまうことがあったが、近くで見守っていたメイリアスは何も言わなかった。

空腹が満たされると再び睡魔が襲ってくる。メイリアスが片付けを終えて部屋を出て行くと、ユーティアがかみ殺そうとしていたあくびを漏らす。

「眠たそうだな、ユーティア。……少し、眠ったらどうだ？」

と、ギユスターが言う。

ユーティアはぼーっとする頭を振りきりながら立ち上がり、ギユスターへ言った。

「うっん、これくらいならまだ我慢できるわ」

そしてまたあくびを漏らす。ギユスターは立ち上がると、彼女をベッドへ誘導した。

「眠った方が良い。疲れてるだろ？　ちゃんと起こしてやるから眠れ」

「……うん、分かった」

しびしび頷いたユーティアはベッドに腰を下ろし、その靴をギユスターが脱がしてやる。ベッドへ横になったユーティアはまたあくびをした後、眠たそうな声で尋ねた。

「ずっと気になっていたんだけど、特別神衛部隊って何なの？ みんな軍の人よね？」

そつと毛布をかけてやりながらギユスターは答えた。

「ああ、四人とも軍人だ。ノーアは将官で一級魔法使いでもあり、シルフは参謀の人間で二級魔法使い、ダリウスと俺は中尉だが能力を買われて選ばれた」

と、ベッドの端に腰を下ろす。ユーティアはだんだんと遠のいていく意識を無理やり捕まえて再び質問をした。

「魔法使いが二人もいるのね、彼らはどんな人たちなの？」

「そうだな、知り合ったのが三ヶ月前だからまだ分からないことの方が多いが、みんな良い人だ。一番年上のノーアはしっかりしていて、頭の回転も速い。シルフはああ見えて博士号を取得していて――」

久しぶりに聞く優しい声に安堵した途端、捕まえたはずの意識が急激に遠ざかって行ってしまった。ベッドの白い敷布団が見えなくなり、ギユスターの声が途切れ途切れになる。身体が宙に浮くような感覚がすると、ユーティアは何も考えられなくなった。

「魔法使いのうえに魔法石の扱いも……、眠ったか」

ギユスターは話すのをやめて、無邪気な寝顔を静かに眺めた。

* * *

静かな朝だと、目覚めて思った。

「おはようございます、ユーティアさん。ぐっすり眠っておられたようですが、気分はどうですか？」

聞き慣れない女性の声に、冷め切らない頭がうつろに声を発する。
「悪くはないけれど、何だか不思議な……」

天井の白とふわふわの布団にユーティアははつとした。慌てて上半身を起こすと、侍女がすぐそばに立っていた。

「大丈夫ですか？ もう朝ですよ」

と、メイリアスがにっこりと微笑む。恋人の姿はすでになく、何故だか嫌な感じがして眠気が一気に吹き飛んだ。

「予定では七時にダリウス様がいらつしやいます。朝食は七時半からです。通常の起床時刻より少し早いですけれど、まずは服を着替えましょうか」

ユーティアは昨日の昼間に眠った後から今まで記憶がないことから、自分が相当長い時間眠ってしまった事に気づく。しかしメイリアスは何も言わず、部屋の隅にある衣装棚へ意気揚々と向かって行った。

とりあえずベッドから出たユーティアは、どうしようか迷いながら彼女の方へ歩み寄る。

「明日か明後日には特別注文した服が五着ほど届くので、それまではずである物で済ませますが、これからは城内にふさわしい格好をするようにお願いしますね。この部屋で生活するからには、ある程度の礼儀を覚えていただかなければなりません」

そしてメイリアスは薄い桃色のワンピースを取り出し、ユーティアへ顔を向けた。

「まあ、ぶつちやけて言うと、あたしはあんまり気にしないんだけどね」

唐突な態度の変わりように、どう反応を返せば良いのか分からなくなる。

メイリアスは困惑するユーティアに優しく微笑むと、また言った。「本当はあたし、貴族とか王家の下に仕えるのは好きじゃないの。だから、今回はこうして、普通の女の子の世話役に任命されて、すごく気が楽なのよ。どうせあなた、貴族の生活には慣れていないんでしょう？」

「は、はい。都会に来たのも、初めてです……」

そう答えるとメイリアスは嬉しそうに頷いた。

「じゃあ主従関係はなくしてお友達ということで仲良くしましょう。さあ、服を脱いで」

ユーティアはまだ戸惑いを隠せずにいたが、言われたとおりに着ていた服を脱ぐ。慣れない他人の前で下着姿になるのには抵抗を感じたが、仕方ない。

「綺麗な肌してるわねえ、白いし細いし……胸も大きくて羨ましいわ」

と、メイリアス。恥ずかしくなったユーティアはとっさに両腕で胸を隠した。

「ふふ、恥ずかしがらなくて良いのよ。さあ、足をどうぞ」

と、ユーティアの気持ちを無視するように、メイリアスは楽しそうに促した。

誰かに着替えを手伝ってもらう事など今までにない経験だったので、始終戸惑ってはかりだった。どうにかワンピースに着替え終わると、メイリアスは服をかごへ入れ、ユーティアへ言った。

「次は髪の毛を梳かすから、そこへ座って」

鏡台の前にある椅子を指差され、ユーティアはすぐにそこへ腰を下ろす。その後ろに立ったメイリアスは引き出しから木製の立派なくしを取り出した。

「普段、髪は結っているの？ それともこのまま？」

ユーティアの明るい茶髪に優しくくしが入る。上から下へと、ゆっくり梳かされていく感覚に、少し身を震わせながら返事をした。

「基本的には、結っていません」

「あら、そうなの。たまには結ってみると気分が変わるわよ。もう少し伸ばせば色んな髪型が出来るでしょうし、恋人と会う時くらいはお洒落しなきゃ」

と、メイリアスはにこつとする。鏡越しの笑顔にドキツとしたユーティアは、思わず目をそらした。――肩に付くか付かないかくらいのもつすぐな髪の毛、左で分けた前髪が頬にかかっている。

「もしやりたい髪型があったら、注文してくれて良いわよ。髪飾りだって、頼めば買いつてくれるはずよ」

一通り梳かし終えると、メイリアスは再び引き出しを開けて銀の髪留めを取り出した。

「ほら、髪飾りをつけただけでも印象が変わるでしょ？」

それで前髪を横に留めると、いつもと違う自分に会えた気がした。「……そうですね。わたし、あんまりお洒落つてしたことなかったです」

「じゃあ、これからは思う存分お洒落を楽しみましょう。欲しい物があつたら何でも言つて、すぐ上に頼んで買わせるから」

と、メイリアスがにっこり笑つた。

メイリアスはユーティアに様々なことを教えてくれた。そうして二人で盛り上がりつていて、ふいに扉を叩く音がした。メイリアスがとつさに座つていた椅子を立ち、ユーティアは緊張して座り直す。「おはようございます、ユーティアさん」

と、入つてきたのはダリウスだつた。メイリアスが部屋の中を片付け始め、ユーティアは返事を返す。

「お、おはようございます、ダリウスさん」

まだ慣れていない相手なので、どうにもぎこちない挨拶になつてしまつた。しかし、ダリウスはにこつと笑つてくれる。

「昨日はよく眠れたかい？ ギュスターの話によると、昼寝のはずがどんなに声をかけても起きなくて、今日になつちやつたらしいね」
楽しいおしゃべりですつかり忘れていた申し訳ない気持ちが目を覚まし、ユーティアは思わず俯いた。

「す、すいません……わたしも、そんなつもりなかったんですけど、気づいたら朝で」

「謝らなくつていいよ。慣れない場所に来て疲れちゃつたんだろ？ しょうがないことさ」

と、気さくな様子でダリウスは言つと、ユーティアの向かいの席へ腰掛けた。洗ひ物の入つたかごを持ちあげ、メイリアスが部屋を

出て行こうとする。

すると、すれ違いざまにダリウスが彼女へ声をかけた。

「おいメイリアス、そんなに固い顔しながら仕事するなよ」

扉の数歩前で立ち止まったメイリアスは顔だけ向けて言い返す。

「お言葉ですが、あたしには笑顔で仕事するだけの余裕がないんです。ダリウス様」

互いにむっとした表情を浮かべ、メイリアスが「失礼しました」と、部屋を出て行く。

そして二人きりになると、ユーティアは疑問を口にした。

「あの、お二人は知り合いなんですか？」

ダリウスはユーティアの顔を見ると、微妙に口角を吊り上げてみせる。

「知り合いつていうか、ただの腐れ縁だよ。オレが軍に入った時に、あいつもちょうど侍女としてここで働き始めて、それから何度か城内ですれ違ったりしてるうちに、今みたいな関係になっただけさ」
本当にそれだけなのだろうか、と、ユーティアは思ったが、口にはしなかった。

ダリウスが軍服のポケットから一枚の紙を取り出して言う。

「えーと、護衛のことなんだけど、オレの次にノーマ、ギユスター、シルフの順番になってるから覚えておいて。それと、今はまだ闇魔法の奴らも表立った行動はしていないから城内をうろつくことは可能で、街に出る時は事前にノーマの許可を取ること。分かった？」

「……はい」

行動に制限がかけられるのは守られている証拠なのだろうと、少しだけ苦く思う。

「これは国のしていることだけど、その責任は全てノーマにあるから気をつけてくれよ。これから何があるかなんて分かんないし、奴らが戦争を起こす可能性だってないとは言えない。まあ、オレたちが付いているから大丈夫だとは思っただけだね」

と、ダリウスはまた笑顔を作った。そして壁にかけられた振り子

時計をちらりと見やつてから話題を振ってくる。

「ところでユーティアは、今まで何の仕事してたんだい？」

ユーティアは質問に答えようとしてはっとした。ヴィアンシュからもらったペンダントを鞆にしまったまま放置していたのだ。

「パン屋です。両親の仕事を手伝っていたんですが、自分ではほとんどパンを焼いたことがなくて、いつも店番してました」

と、室内をきよろしながら言う。自分の鞆はメイリアスがどこかに仕舞ってしまったらしく、見当たらない。

「へえ、パン屋か。何だか面白そうだね」

ダリウスが相槌を打つのと同時に、ユーティアはベッド脇の小棚の上に何かが置かれているのに気が付いた。あの木彫りの花のペンダントだ。

立ち上がって小棚に向かったユーティアはすぐにそれを手にとった。両手で包みこむようにし、失くしていなくて良かったと安心する。

「あの、これ仲良くしてた女の子からもらったんです」

と、席へ戻り、嬉しそうにダリウスへそれを見せる。ダリウスはあまり興味がなさそうにペンダントを眺めると言った。

「良かったじゃん、オレにはあんまりよく分からないんだけど」

率直な台詞にユーティアは顔を俯かせ、心の中で自分を責めてしまふ。相手は男性で軍人だ、ヴィアンシュのペンダントの良さを分かってくれることなんかないと分かっていたのに、自分は何をしているんだろう。

分かりやすく落ち込んだユーティアにダリウスは慌てて声をかける。

「あ、でも子どもが作ったにしては素晴らしい出来だな。デザインもシンプルだし、なんてゆーか……素朴で良いと思うよ」

ユーティアは顔をあげてペンダントに目をやると言った。

「いえ、そんなに褒めていただかなくて結構です。ちなみにこれ、その子が作ったものじゃないですよ。彼女の家が雑貨を作って稼い

でいるので、その中のひとつだと思えます」

ダリウスはしまったと思った。分かりもしないで勝手に物を言うから、こんなことになってしまうのだ。

「……そっか、ごめん」

「いえ、気にしないで下さい」

微妙な空気が流れ、二人とも黙り込んでしまう。互いに何も知らない状態であることに少なからず壁を感じていた。

ふいにユーティアは鏡台の前へ行き、ペンダントを首にかけた。

その姿を鏡越しに見たダリウスは何か言おうとしてためらう。

ユーティアは綺麗に整えられたベッドに腰掛けて、適当に窓の外へ目を向けた。

「どうやってギユスターとは知り合ったんだい？」

唐突な問いにユーティアは遠くの空を見ながら答えた。

「十年ほど前に、彼が家族と一緒に村に越してきたんです。アルグレン村は昔から移住者の絶えない村なので、それで彼と出会いました」

ダリウスはただ彼女の背中を見つめていた。

「じゃあ、恋人になったきっかけは？」

あまり深く知っても意味のないことだとは分かっていたが、場を繋ぐには尋ねるしかなかった。

「村は小さかったので、すぐに友達になりました。彼が貴族の子だと知っていましたが、村に差別や偏見はありません。みんなが平等に生活し、彼のお母さんは家の店を気に入ってひいきにしてくれました。だから、惹かれあう者同士が恋仲になるのも自然の成り行きでした」

ユーティアがちらりとダリウスを見やる。

「……ダリウスさんは、確か中尉なんですよ？ 能力を買われてこの部隊に選ばれたって聞きました」

ふいに発せられたユーティアの言葉に、ダリウスは現実へ引き戻される。

「ああ、そうだけど」

「弓術、やっていらしてるんですね」

と、ユーティアはダリウスの背中にある弓箭を見つめて言った。
どうやら彼女は自分に興味を持ってくれたらしい。

「ああ、本当は魔法使いになりたかったんだけど才能がなくて、その代わりに弓術を極めてみたらこうなったんだ。ちなみに、魔術検定は四級だよ」

人は魔法技術検定——略称・魔術検定——で自分の力がどれほどの物か知ることができた。一番多いのが五級である十五歳までに誰もが持ちうる魔法技術であり、それより上には努力した者と才能のある者しか取得できなかった。ちなみに、魔法使いと呼ばれるのは二級からである。

「わたしは五級です。特にやりたい事もなかったから、何もしてないんです」

そう言ってユーティアが少し笑った。ふと、彼女に嘘はつけないかもしれないな、とダリウスは思う。

「ああ、なるほど。家業を継ぐのに魔法は必要だもんな」

と、ダリウスは納得する。空気が先ほどよりもずっと和らいでいた。

「そういえば、ダリウスさんはおいくつなんですか？」

「オレは今年で十九歳になるよ。ユーティアは十七だろ？ ギュスターから聞いた」

「あ、そうなんですか。じゃあ、部隊の中で一番年下なのは、彼なんですな」

「うん、そうだな。でもあいつ意外としっかりしてるし、剣術で右に出る者はいないって言われてるから、あんまり考えたことはないな」

「そうですか……最初の頃は、無愛想で付き合いにくかったでしょう？ 彼も、わたしと同じで人見知りするんです。最近はどうか分かりませんが、人嫌いなところもあるので、一緒にいてやりにくか

「つたりしませんか？」

するとダリウスは声をあげて笑った。

「ははっ、確かに出会った頃は何も言わないし、返事も短くてやりにくかったな。だけど今はもう慣れたから、気楽に話が出るよ。」

ユーティアが心配することはないと思うぜ」

ユーティアはほっとしてダリウスへ言う。

「それは良かったです。だけど、彼が誰かに迷惑をかけていたら嫌なので、やっぱり心配になっちゃいます」

「本当に良い子だなあ、ユーティアは。君も人見知りするって言っけど、ギユスターの方が重症だと思うね。あいつ笑わないしさ」

「あ、笑わないのは恥ずかしがっているだけですよ。わたしはよく分からないんですけど、人前で笑顔になるのが嫌なんだそうです」
そう返すとダリウスは目を丸くした。

「え、そうなの？　へー、あいつ恥ずかしがりなだけか。意外と可愛いとこあるじゃん」

「はい、だからあんまり彼を悪く言わないで下さいね」

と、ユーティアが微笑む。ダリウスはそんな彼女を見て、思ったことを口にした。

「神の宿り主が君で良かった」

ユーティアは思わず首を傾げた。

「どういうことですか？」

「んー、なんてゆーか……長い時間一緒にいても退屈しないっていうか、守りがいのある女の子だなんて、ふと思っただけさ」

と、にっこり笑う。どう反応して良いか分からなかったユーティアは俯き、ダリウスが何か言うのを待っていた。

「女神フリーアもよくこんなことしたよな。世界を守るために最高神の魂を人間界に隠して存続させて、なのに自分たちはまったく姿を見せないおかげで、こうしてオレたち人間が大変な思いしてるんだぜ？　宿り主の君なんかは特に荷が重いだろ？」

ダリウスはじっとユーティアを見つめていたが、ふいと目をそら

す。

「でも、一番辛いのはギユスターなのかもな。大事な人が安心して生活できないで見えられない……それでも君を守ることが使命なんだから、その使命をまっとうするしかないんだよな」

たぶん、自分の大事な人が神の宿り主だった場合のことを考えているのだろう。ユーティアは顔を上げた。

「やっぱり大事な人は巻き込みたくありませんよね。それならわたしは、こうなった経緯について知りたいです。女神の思惑とか、わたしのこれからが予想されるようなことを知って、自分なりに対処して行きたいです」

「……そっか、前向きだね。宿り主に関する文献はそんなに多くないけど、ユーティアがそう言うのなら、後で城内にある図書室に勉強しに行こうか？」

ダリウスの提案にユーティアはしっかりと頷いてみせる。

「はい、ぜひ行きたいです。それで少しでもみなさんの負担を軽く出来るなら、頑張って勉強します」

朝食後、二人は東にある図書室へ向かっていた。

「この城には西と東に二つ図書室があつて、西は第一図書室、東は第二図書室って呼ばれてるんだ。オレたちの目指しているのは第二図書室。軍事に関する書物が多くを占めているけれど、一部の人間しか知らない場所にそれはある」

春の陽光がまぶしく城内を照らし、ぽかぽかと空気を暖めている。「というのも、西の図書室は政治家が頻繁に利用するから、大事な情報は信用の置ける東側に預けた、ってことなんだ。昔から政治家には汚いことを考える人間がいるからね」

「軍の人に悪い人はいないんですか？」

「基本的にはいないと思うよ。政治家は王家と同等の立場にあるけど、オレたち軍人は王家に仕える者だから、悪いことをしようとしても出来ないのが現実なんだ」

派手な装飾の階段を一階まで下り、赤い廊下を進んでいく。ダリウスの案内がなければ確実に迷う道だ、とユーティアは思った。

「まあ、政治家とつながりを持っている軍人なら、たくさんいるけどね」

角をひとつ曲がると前方に人影が見えた。それが男性と小さな子ども姿らしいとすぐに分かったが、誰かまでは分からない。

「軍人も政治家も多くが貴族出身の人間だから、当たり前と言えば当たり前なだけだよ」

ダリウスはそう言うとは一度口を閉じ、こちらにやってくる人影に声をかけた。

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

短い距離を置いて全員が立ち止まり、ユーティアはようやくそれがノーアと王女であることに気がつく。――プリンセス、と言ったけれど男の子みたいに見える……。

「あ、ダリウスだ。ごきげんよう」。えっと、その人は？」

と、王女克蘭ベリーがユーティアを見上げる。その姿は本当にこの国の姫なのかと疑いたくなるものだった。金色の髪は短く、スカートを履いているわけでもないし、言葉遣いにも気品が感じられない。

「この前お話した方ですよ、ユーティア・サルヴァさんです」

と、何故かその隣にいたノーアがそう紹介してくれた。

「ぼくは、克蘭ベリー・シギン・エレノア・ミルフィュー・ミッドガルドです。お姉さん、お城で保護されてるんだよね？ これからよろしくお願いしますー」

軽いと言うか下品と言うか、どちらにせよ王女とは思いがたい雰囲気少女に、ユーティアは困惑しながら軽く頭を下げた。

「ところで、お二人はどちらへ行くつもりですか？」

ノーアがそう尋ね、ダリウスが答える。

「図書室ですよ、彼女が勉強したいって言うから」

克蘭ベリーは興味深そうにじっとユーティアを見つめていた。

年齢的には十二歳くらいだろうか。

「なるほど、あまり余計な事は吹き込まないで下さいね。それでは、私たちはこれで」

と、ノーアが克蘭ベリーを促して再び歩き始める。それをユーティアは少し見送ってから、ダリウスへ質問をした。

「あの、どうしてノーアさんが王女様と一緒にいらっしゃるんですか？」

「家庭教師の仕事してるんだよ。本業は軍人だけど、あることをきっかけに王女様がノーアにべったりなついちゃって、それからずっと家庭教師として雇われてるんだって」

と、ダリウスは歩き始めた。その後を追いながら、ユーティアはまた質問を返す。

「じゃあ、あの王女様はどうしてあんな格好を？ 女の子なんですよ？」

美しい金髪と可愛らしい顔が台無しだ、と思った。

「趣味らしいよ。王女様は小さな頃からわがままで、いつからか男装するようになったって。ちゃんと理由を知りたいなら、直接本人に聞いてくれ」

「……そうですか」

別に男装が悪いことではないと認識していたつもりだったが、ユーティアはどうしても違和感を拭えずにいた。

廊下を一番奥まで行くと、ダリウスが立ち止まった。

「さあ、ここが図書室だよ」

と、扉を開けて中へ入る。どこか古ぼけた感じのする独特の匂いが鼻を突き、ユーティアは所狭しと並べられた本棚の数に驚く。

「ユーティア、ちゃんとオレについてきてね」

「あ、はいっ」

名前を呼ばれて我に返ったユーティアは、慌ててダリウスの後を追う。自分にあてがわれた部屋と同じくらいの面積しかない図書室は狭く感じられ、人の姿もほとんど見られなかった。

右側の壁伝いに奥まで進んで行くと、木製の古風な扉が見えてきた。そこに取っ手はなく、中央より下あたりに、黄色いひし形の魔法石がはめこまれているだけだった。

扉の前に立ったダリウスは右手で魔法石に触れる。

「オースサズ、ド、ファルノウン、ホーパ、フィヨルニル」

何かの外れる音がし、扉が開かれた。先にユーティアを中へ入れ、ダリウスは周囲を確認しながら扉の先へ行く。

二人が室内に入ると扉が勝手に閉じて、ユーティアはおずおずとそこにある景色を見回した。小さな部屋なのに本棚が壁に寄せられているため、広く感じられる。

「この部屋、内側からしか開けられないようになってるんだ。外から開ける時は合言葉が必要で、普通の人は勝手に入っちゃいけない場所なんだけど」

「え？ それじゃあ、いけないんじゃないですか？ わたし、勝手にこんな」

と、ユーティアが慌てるとダリウスは笑った。

「いや、誰にも言わなければ大丈夫だよ。確かに入っちゃいけない決まりになってるけど、オレは特別神衛部隊の一員だし、神の宿り主である君には、詳しい情報を知る権利がある。そうだろう？」

「……そう、ですね」

言われて見ると、自分も彼も特別な人間だった。ユーティアは納得し、近くの本棚に寄った。

「王家に伝わる大事な記録とか伝承の類もここにあるから、君の知りたいことはそんなに多くないんだよね。とりあえず、これとこれが一番詳しい本かな」

年季の入った表紙がずらりと並んでいる中で、ダリウスが本と言うよりは冊子に近い物を二つ取り出してユーティアへ渡す。

「最初に神の宿り主になった人の事が書かれてる。真相はあやふやだけど、参考にはなるんじゃないかな」

ユーティアはそのうちの一冊を慎重にめくり、その文面に目を通

した。

『神々の争いが休戦した頃、女神フリーアは一人の青年に最高神アルファズルの魂を宿らせた。二百二十七年、四の月と二日目のことである。女神は青年の夢に現れてこう告げた。――彼の魂は何世紀にも渡り人々の間を旅するでしょう。その始まりが貴方で、その終わりは闇の中にあります。人々が進歩を遂げていく最中、魂に危機が訪れることもあるでしょう――』

「どう？ 知識になりそうかい？」

ダリウスの声にはつと顔をあげ、ユーティアは答えた。

「はい、理解しにくい部分もありますが、意外と勉強になりそうです」

と、ダリウスのそばを離れて窓際へ向かう。カーテンが閉ざされているので明るいわけではなかったが、じんわりと春の熱が伝わってきた。

『女神は人間界に最高神を落とした。世界の創造主である彼を生きながらえさせるためにしたことであるが、宿り主である青年は言った。――これは僕らを試しているんだ。最高神を守りきることができるか、つまり世界を守りぬくことができるのか、それを試されているのだ――。この時から天上界と人間界を結ぶ道は破壊され、今では誰も女神に会うことはできなくなった。しかし我々にできることはただひとつ、最高神を守り続けることである』

今の時代、神々が本当に存在するのかは疑われている。信仰が薄くなることはないが、昔と比べると人間は疑い深くなっていた。ユーティアは幼い頃から神の存在を信じていたので、文面に違和感を覚えることはなかったが、すぐに納得はできなかった。

『宿り主には弱点がある。光の結晶である最高神は闇に触れるのを恐れていた。それと同じで宿り主もまた、闇に触れてはならない』

「ダリウスさん、あの、闇って何ですか？」

退屈していたダリウスは距離を縮めることもなく、自分の持つ知識を彼女へ与えた。

「魔法の定義としては、光と相反する力のことで、光とは決して交じり合わない属性のことだね。闇魔法っていうと、人や物を傷つける能力が代表的だな」

「神の宿り主は闇に触れてはいけないそうですね……わたしも同じでしょうか？」

ダリウスはこちらへやってくると、見ていたページを覗き込んだ。
「ああ、そういうばそんなこともあったな。闇っていうのは月、総じて夜を指すことが多いから、きっとユーティアが夜に外出するのは良くないだろうね」

「そうですか……ありがとうございます」

ユーティは納得すると、また本に目を落とした。

『眠れる魂に闇を一掃するだけの力はない。宿り主はただ、女神に背負わされた運命を生きるしかないのだ』

* * *

「ユーティア、服が届いたわよ！ ほら、起きて起きて！」

メイリアスの嬉しそうな声でユーティアは目を覚ました。昨日の疲れが残っているのか、頭がぼーっとする。

「仕立て屋の人が気を利かせて、すぐに届けてくれたのよ。さあさ、今日はめいっぱい、お洒落しましょ！」

と、メイリアスが布団を取り上げた。ユーティアは寝返りを打って強く目を閉じる。しかし、すぐにカーテンが開かれて、窓から漏れてくる朝陽に邪魔されてしまった。

「ちよつとユーティア、起きなさい！ まったくもう、今朝はプリンセス・クランベリーから可愛い髪飾りもたくさん届いているのよ」
仕方なく目を開けたユーティアはあくびをしながら上半身を起こす。机の上には、きらきらした箱があった。

早くベッドを下りて着替えましよう、とメイリアスが急かす。ユーティアはすぐにベッドを出て、彼女の待つ衣装棚の前へ向かった。

春らしい黄緑色のやわらかな素材で出来たワンピースに身を包み、似た色合いの髪飾りで前髪を横に留めたユーティアは緊張していた。「こんな格好、したことないから慣れないわ……」

「大丈夫よ、これから毎日着るんですもの。お洒落なあなたを見たら、きつとミスター・ファールバードも惚れ直すわ」

「……そういうことじゃ、ないんだけど」

メイリアスがユーティアの肩を軽く叩いて励ますと、扉を叩く音がした。そちらに目をやったユーティアはその場に立ちすくみ、メイリアスが囁く。

「ミスター・アデュートルだわ、失礼のないようにしなきゃ」

そして部屋に入ってきた銀髪の青年ノアは、貴族のようなユーティアの姿に一瞬だけ驚くと、すぐににっこり微笑んだ。

「おはようございます、ユーティアさん」

「お、おはようございます……っ」

恥ずかしくなって顔を俯けると、ノアが優しい声で言った。

「そんなに硬くならなくて結構ですよ、とてもお似合いです」

部屋を片付けたメイリアスが満足げに部屋を出て行き、ユーティアは少し顔を赤らめる。

「あ、ありがとうございます……」

素直に喜ばなくて、ただ恥ずかしかった。ユーティアの近くに来たノアは笑顔を崩さずに口を開いた。

「お聞きしたいことがあるのですが、今まで闇魔法に触れたことはありませんか？」

はっとしたユーティアは、すぐに首を横へ振った。

「いえ、ないです。生まれ育った村は魔法自体、あんまり使いませんでしたから」

「そうですか。では、何か特定の物に触れたり、見たりすることで拒絶反応を示したことは？」

ゆっくりと椅子へ腰掛け、ユーティアは答える。

「……思い当たらないです」

「そうですか、ありがとうございます」

と、その向かいへ座り、ノーアは口を閉ざして考え込んだ。

その様子を見て、ユーティアはふと心配になってしまふ。きつと、闇魔法の勢力について考えているのだろうが、自分は何も力になれない。

「……言い忘れていましたが、今日一日お付き合いさせていただき
ますね。気楽にしてくださって構いませんし、何かあればすぐに言
ってください」

考えるのをやめたノーアがまたにつこりと微笑んで、ユーティア
は我に返る。

「あ、はい」

どんなに自分が考え込んでも無駄だと思った。それなら今を楽し
く生きよう、と考えてユーティアはノーアを見る。

「あの、今朝プリンセス・克蘭ベリーからたくさん髪飾りを頂い
たんですけど、これはどういうことなんですか？」

ノーアは頷いた。

「一言で言つと、気に入られたのでしよう。あの方にとって髪飾り
を送るのは友好の証ですから」

「そうなんですか……じゃあ、どうしてプリンセスは男装を？」

ユーティアが本当に聞きたいことを尋ねると、ノーアは言った。

「それは私にも分かりません。ですが、ただ好きでやっているみた
いですよ」

「女の子、なのにな？」

納得できなかったユーティアが聞き返すと、ノーアはどこか楽し
そうに笑う。

「ええ、あの方は変わっていますからね。それに、わがままを許さ
れるのも子どもの内だけですから」

つまり王女の男装は趣味であり、好きだからやっているだけ、で
あるらしい。よく分からないな、とユーティアは思った。

第三章 闇魔法

愛するギュースター様へ

ようやくお城での生活に慣れてきました。これもあなたの親切な教えのおかげだと思っています。ノーアさんやダリウスさん、シルフさんにメイリアス、そして克蘭ベリー王女様も、みんな優しくて面白くて、田舎者のわたしにこんなに親切にしてくれる人たちはそういないように思いました。

お仕事の方は、はかどっていますか？ この二週間近く、わたしはずっと遊んではかりだったので、情報らしい情報もよく知りません。闇魔法の勢力はどうなっているんでしょう？ 一番詳しくそうなノーアさんに何度か尋ねましたが、何も教えてもらえませんでした。それと最近知ったことですが、わたしが神の宿り主であることを予言した方がいらっしやるそうですね。まだ会ったことがないので、許可されるのならばぜひお会いしたいと思っています。

正直な話、わたしはあまり情報を持たされていないように思いますが、このことに何か重大な意味や理由があるのならわたしは諦めませんが、やはり知らないままでは嫌です。教えてもらえるギリギリのところまで、情報が欲しいです。闇魔法の勢力だって、わたしはよく知りません。自分を狙っているかもしれない人たちのことを知らないでいるのは、それはそれで危険だと思うのですが、どうでしょうか？ ぜひ、ノーアさんを説得して、わたしにいろんな情報を伝えてください。お願いします。

それでは、二日後にまたお会いしましょう。イザヴェル城のユーティアより

* * *

飾り気のない白と黒のワンピース、デザインは今流行りのもので

丸く膨らんだスカートが可愛らしさを引き立たせる。頭は横の髪を後ろにまとめて黒い髪飾りで留めていた。

「ミスター・ファールバード、とても可愛らしいと思いませんか？」

ギユスターはひかえめにふわりと回って見せた彼女の愛らしさに、思わず言葉を失っていた。

「どう？ 似合ってるかな？」

と、ユーティアは照れ笑いを浮かべながら彼を見る。

「……あ、ああ、可愛いと思う。——じゃなくて！ 今朝はノーアから許可が下りて、お前にいろいろ教えてやれることになったんだ」
ギユスターが慌ててそう言いなおし、ユーティアへ持ってきた紙の束を渡した。

「あ、手紙読んでくれたのね。ありがとう、ギユスター。で、これは？」

「闇魔法の勢力についてまとめたものだ。ユーティアの身を守るのに使えるような情報は全て話すつもりだ」

満足したメイリアスが朝食の準備をしに部屋を出て行き、ギユスターは椅子に腰を下ろした。

「前にも話したと思うが、俺たちの仕事はお前を守ることと、危機を回避するために闇魔法の使い手を一人残らず捕まえることだ。今まではあてになる情報があまり手に入らなかったんだが、ついこの前、ようやく有力な情報が入ったんだ」

ユーティアはその向かいに座りながら、受け取った紙束をばらばらとめくって見た。

「奴らはやはりお前を狙っている。その目的は調査中だが、神の宿り主を探しているのは確かだそうだ。俺たちが動いているのは奴らも知っている様子で、いつ何が起こるか分からない状態になっている」

「じゃあ、もしかしたら近い内に何かが？」

「ああ。ノーアは昨日から城の警備を強化して、城内に入る者にも制限をかけ始めた。だからお前も、これからはあまり部屋から出な

いようにしてほしい。街へ行くのも、今までより厳しくなるだろう」
ユーティアは紙束を机の上に置く。

「分かりました。他の情報は？」

「それと……実は、最高神がどうしたら目覚めるのか、その方法がまだ分かっていないんだ。闇魔法の勢力が先にその方法を見つけてしまったら、こちらは圧倒的に不利になる」

「……記録には残ってないの？」

「ずいぶん前から様々な文献を調べているが、まだ見つかっていない。今まで一度も最高神を復活させた者がいないことから、闇魔法の勢力も俺たち同様にその方法を探すのに苦労しているはずだ。しかし油断はできない」

そう言つてギュスターが小さく溜め息を零した。

「どちらにせよ、俺たちは闇魔法の勢力に捕らわれないよう、お前を守るしかないわけだ」

ユーティアは俯いた。——自分自身、この状況に危機感を持って生活しなければ。

「ところで、予言者に会いたいと言つてただろ？ 彼女の方から一度お前に会いたいと言つていて、今日の午後から会う約束が決まった」

と、ギュスターが口調を明るくしたものにした。

「本当に？」

少し目を丸くして聞き返すと、ギュスターがしつかりと頷く。

「ああ、本当だ。今日は彼女の従兄であるシルフも同席する。ただ、彼女には少し気難しいところがあるから、それだけは覚悟しておけよ」

「うん、ありがとう」

先ほどまでの嫌な気分が、にわかに晴れていた。

「闇魔法は元々、百年前に禁忌の術に指定されたのよね」

青い廊下はとても静かで、ユーティアとギュスターの声が遠くま

で響きそうだった。

「ああ、だが禁忌だからこそ、それに惹かれて習得しようとする奴らがいる。それに禁忌に指定されたところで、完全にこの世から消えるわけじゃない」

「どこかから情報が漏れているのね。闇魔法は魔力に関係なく誰でも使えるから、それを悪い方法に使うこともたやすい」

「最高神の言い伝えは各地に広まっているし、それと闇魔法を結び付けて考える奴は少なくないんだろう」

ユーティアが俯く。

「……本当にわたし、大変な物を背負っているのね。嫌じゃないけど、重たいわ」

ギュスターは息をついた。

「闇魔法を禁忌にした理由は、俺たち人間が生きて行く上で必要だからだそうだ。闇魔法は光よりも攻撃的で、戦争の道具としてよく用いられていた」

「でも、戦争はまだ、世界のあちこちで起きているわ」

「……結局、争わずにはいられないんだろう。己の欲望のためなら何だってやるのが人間だ」

「汚い生き物ね……わたしは、みんなが仲良く生きていけたらいいと思うのに」

「ああ、俺もそう思う」

だが、とギュスターは続ける。

「ノーアは、自分の平和を守るために争いを起こすのだと言っていた。平和の意味は人により違うってことだ」

「そうね、確かに一理あるわ」

陽に照らされる床を二人の影が染める。

「何もかもが話し合いで解決しないのも、きっとそういう理由なんでしょうね」

「だから俺たちは、俺たちの平和のためにお前を守る」

と、ギュスターはユーティアを見た。目を合わせるとユーティア

は少し上目遣いと言う。

「それにしても、ギュスターったらまた髪切らずにいるのね。前髪、邪魔っぽくはない？」

顔を前へ向けたギュスターは自分の髪を気にしながら答えを返した。

「ん……別に平気だ。まだいける」

「駄目よ、絶対にそれ長すぎるわ。横だって、耳が隠れちゃってるじゃない」

そしてユーティアが彼の伸び放題になった髪へ手を触れると、ギュスターは嫌そうに避ける振りをした。

「長髪のあなたも嫌じゃないけど、せめて結んだらどう？　今のままじゃかつこ悪いわよ」

「そうか？　俺はあまり気にしないんだが……」

ユーティアは手を引くと呆れたように言った。

「春が終わったらもう夏よ。そのままと見てるこっちが暑苦しいわ」

用意された部屋で待っていたのは車椅子の少女だった。

「は、初めまして。ユーティア・サルヴァです」

初対面の相手をつきり大人の女性だと思っていたユーティアはびっくりして、すぐにその少女が予言者だとは信じられなかった。

「お会いするのは初めてね、私はミシュガーナ・ノルン・オードと申します」

十五歳くらいだろうか、外見のわりに大人びた口調だった。長い黒髪をひとつに結っており、車椅子に座った身体は華奢だ。脚が悪いらしく、下半身全体を隠すように青い膝掛けがかけられている。

「ミシュガーナ、あまり彼女をいじめてやるなよ。いくら機嫌が良くても抑えてる」

彼女の隣にいたシルフがそう忠告すると、ミシュガーナは言った。「大丈夫よ、シルフィネス。それに私の機嫌を良くしてくれたのは

あなたですもの」

シルフが呆れて溜め息をつき、ギユスターはユーティアを見る。

「まあ、そういうことだ。話したい事があるなら好きにやってくれ」

「……う、うん」

頷いたユーティアは静かに彼女の元へ歩み寄り、改めて声をかけた。

「予言者さん、なんですよ？ あなたのおかげで、わたしが保護されたって聞きました」

「そんなに丁寧な言葉、使わなくていいわよ。私も敬語で話す気はないから」

あまりにも堂々としたミシュガーナの態度にユーティアは困惑した。

「あ、うん。えっと、それでわたしが伝えたかったのは……わたしを見つけてくれて、ありがとう、ってことです。あなたがいたおかげでわたしは今日までやってこられたから」

そう言っただけユーティアがにこっと笑うと、ミシュガーナはきよっとした顔をした。そしてシルフを見上げると、

「しばらく二人きりにさせてもらっても良いかしら？」

と、問う。シルフはぶっきらぼうに「どうぞ、お嬢さま」と、返した。

「ちょっとあっちへ行きましょう」

ユーティアに向き直ったミシュガーナは、すぐに部屋の隅へ向かう。今まで自動で動く車椅子を見たことのなかったユーティアは、それに感心しながら、彼女の後を付いて行った。

ギユスターとシルフが遠くからこちらを見守る中、ユーティアは尋ねる。

「その車椅子、どうなってるの？」

ミシュガーナはまたきよっとした顔を向けた後、少し嬉しそうな顔をした。

「シルフィネスが作ってくれたのよ。彼、魔法石の研究をしている

でしょう？　それでその実用化に向けて、試験的に車椅子に魔法石を取り付けたの。魔法石は一定時間しか稼動しないから、週に一度動作点検をするの。でも今日、彼が新しく改良した魔法石を取り付けてくれたから、今までの何倍も移動が楽になったのよ」

と、一気に説明をする。ユーティアは第一印象と違う彼女の姿に困惑しながらも、車椅子の仕組みに興味がわく。左右の肘掛けに不透明な黄色の石がついており、左右の車輪にも同じ物がはめ込まれている。それに手を触れることで魔力が発生し、自在に動かす事が出来るらしい。しかし、遠くから見ただけでは、普通の車椅子とあまり変わらないように見えた。

「シルフさんの研究ってこういうことだったのね、すごいわ」

「でも、まだ実用化するには程遠いらしいわ。私だってはつきり言うてしまえば、ただ実験に使われてるだけだもの」

そう言いながらもミシュガーナは、やはり嬉しそうな顔をしていた。

「そつえばあなた、シルフィネスの空馬車に乗ってイザヴェルへ来たんでしょ？」

「ええ」

ユーティアの返事に、ミシュガーナは再び長々と話し始めた。

「あれも魔法石を使用しているのだけれど、普通の空馬車とは違うのよ。一般的にはペガサスの飛ぶ力で動いて、車体に取り付けた魔法石に自分の魔力をぶつけることで宙へ浮くの。でもシルフィネスは、魔法石その物にある浮力を魔力で引き出しているだけなのよ。だから普通の空馬車よりも疲れないで済むし、何より一定した安定感をずっと保っていられるの。素晴らしいでしょう？」

まるで自分のことのように従兄を自慢する彼女は、何だか可愛らしかった。きつと従兄妹同士、仲が良いのだろう。

「あなた、シルフさんのことが大好きなのね」

するとミシュガーナがきよとした。

「……別に、嫌いではないけれど」

と、首を傾げる。どうやら彼女は、あまりそのことについて考えたことがないようだ。

「でも、彼とは兄妹みたいなものよ。シルフィネスのしていることは素晴らしいし、正直、感謝してるわ。だけど好きとか嫌いとか、あまり考えたことなかったわね」

そう言ってミシュガーナは少し俯いた。このまま悩みだしそうな彼女の様子にユーティアは言う。

「それはつまり、好きってことだわ。嫌いだったら、他人に自慢なんかしないでしょう？」

「……それもそうね」

納得しかけたミシュガーナがこちらを見て、ユーティアはにっこりと微笑んだ。

「だから、そんなに考え込まないで。兄妹みたいに思える人がいるなんて、すごく素敵なことよ」

ミシュガーナは目を丸くすると、やがてふわりと微笑みを浮かべた。

「あなた、面白い人ね」

* * *

所々にリボンをあしらった薄青色のワンピースに白の薄いカーデイガン、前髪を横で留めた髪飾りは大人しい白の花型だった。

「おはようございます、ユーティアさん」

「おはようございます、シルフさん」

いつものようにシルフが小さく微笑み、ユーティアもにっこり微笑み返す。

「昨日はミシュガーナが世話になったな。また会う約束もしたんだって？」

メイリアスが朝食の準備をしに部屋を出て行き、シルフはいつものように椅子へ腰掛けた。

「はい、一週間後に約束しました。今度はこの部屋に案内してお洒落したり、昨日は出来なかった話をたくさんする予定です」

「そうか。あいつ、身体のせいで友達がいないから、ユーティアがいてくれて嬉しいよ。結構ひねくれてるけど根は良い奴だから、長く付き合ってくると助かる」

と、シルフは安心した笑みを見せた。まるで保護者のようなことを言うな、とユーティアはおかしく思う。

「心配しないで下さい、言われなくてもそうするつもりですから」
そう返すと、シルフはほんの少し目を丸くして、「ありがとう」と、笑った。

今朝は妙に空気が湿気ており、外ではぱらぱらと雨が降っていた。庭へ出ようと思っても、天気が悪いので気分が乗らない。

「ところで、今日の午後からサロンが開かれるそうだ。プリンセス・克蘭ベリーから招待状が来ている」

シルフはそう言つてユーティアへ白い封筒を渡した。

「月に一度行っている定期サロンなんだが、今回は巷で噂になっている吟遊詩人を招いているらしい。天気も良くないし会場も城の中だから、行ってみるか？」

封筒から取り出した招待状を一通り見て、ユーティアは嬉しそうに顔を上げる。

「はい、ぜひ行かせていただきます」

サロンには多くの貴族がやってくる。そこに画家や音楽家などを招いて芸術を鑑賞し、同時に批評するのが通例となっていた。

「あ、ユーティアだ！」

サロン専用の広間へ行くと、すぐに克蘭ベリー王女がユーティアを見つけてくれた。

「来てくれてありがとう。今日はシルフと一緒になんだね。シルフ、ごきげんよう」

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

と、シルフが返し、場の雰囲気には戸惑いながらユーティアも言う。
「えっと、ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー。今日は招待していただき、ありがとうございます」

克蘭ベリーはにっこり笑った。

「ううん、お礼を言うのはほくの方だよ。ユーティアが来てくれて嬉しいもん」

その無邪気な返答にユーティアが安心した直後、克蘭ベリーがユーティアの手を引いた。

「ちゃんと席は取ってあるんだ。こっちだよ」

と、部屋の中央へ向かう。

室内には上質な素材のやわらかいソファがいくつも置かれ、その中央付近に小さな舞台が設置されていた。

すでに集まっていた貴族の視線が王女の隣にいる少女に向かい、ユーティアはますます戸惑ってしまうが、近くに付いているシルフもまた、同じように視線を集めていた。

「プリンセス・克蘭ベリー、彼女にもちゃんと気を遣ってくださいね」

と、シルフが言うと、ようやく克蘭ベリーは状況を把握したらしくはっとした。

「あ、うん。でもユーティアにはほくが付いてるから、そんなに心配しないで良いよー」

そうは言っても、貴族たちがユーティアを悪く思わないはずがない。克蘭ベリーが彼女の手を強く握り、ユーティアは強気でいようと決意する。

「……ありがとうございます、お二人とも」

やがて始まったサロンは美しい音楽に溢れていた。余興で数人の楽士たちが演奏をし、場内は一気に盛り上がる。

「今日のメインはこれからだよ。吟遊詩人のミスター・マーニって人」

と、ふいに克蘭ベリーがユーティアに話しかけた。

「ぼくにはよく分からないんだけど、女の人みんな惚れちゃうくらいカッコイイって言われてるの。ま、見てみれば分かるよ」

そして周囲がざわざわし始めると、くすんだ色合いの青でまとめた、いかにも旅芸人風の衣装を着た青年が舞台へ立った。整った顔に切れ長の目が魅力的で、長く伸ばした金髪はゆるく後ろでひとつ結びにしている。

その手には弦楽器のリユートがあり、彼は仰々しくお辞儀をしてみせた。

「……すごい人気ですね」

先ほどまでは静かだった女性たちが、きゃあきゃあと声を上げていた。吟遊詩人のマーニはそんな黄色い歓声を身振りで制し、おもむろにリユートを奏で出す。

——混沌の中心に泉があった——泉から水があふれ出て、空気に触れて大地が出来た——泉は拡大し海を成し、大地と溶け合った瞬間に巨人が生まれ出た——。

「いつ聞いても素晴らしい声だわ、うつとりしちゃう」

ある女性のそう呟く声が聞こえると、クランベリーがむっとした。「声なら、ノアの方が絶対に綺麗なのに」

——彼の血が海と混ざると黒い赤ん坊が、彼の血が風と混ざると白い赤ん坊が生まれた——白い方は大地で最も高いところに居を構え、黒い方は最も低いところに家を作った——やがて白い方は光の王国を築き、黒い方は闇の王国を築く——。

誰もがマーニの歌に聞き惚れていた。滴るように紡がれていく声と弦の音色が、聞く者の心をつかんで離さない。

やがて歌が終わると、マーニが再び大げさな礼をした。歓声が上がり拍手が沸き起こる。

この場に慣れてきたユーティアも、いつの間にか彼の歌に心を躍らせていた。

「ありがとうございます、ご婦人、そして紳士の方々。今回は要望にお応えしてもう一曲、披露させていただきます」

と、マーニがまたリユートを構え、場が静まる前にユーティアと目を合わせた。ドキッとしたユーティアに、彼は艶っぽく微笑むと言った。

「お聞きください……ミール・ノート——」

その刹那、室内にいた人々が次々に気を失って倒れだした。はっとして隣にいた克蘭ベリーへ目をやると、彼女もまた同じように意識を失っている。

ユーティアがその異変に気づいた時には、全員が床へ伏せてしまっていた。

「さあ、脚を見せていただきますようか。神の宿り主さん」

数分前にはなかった顔がそこにあった。鋭い目つきを尖らせて、リユートを捨てたマーニがこちらへ寄ってくる。闇魔法だ、とすぐに思った。

「いや、誰かつ……シルフさん！」

怖くなつて叫び声を上げるが、すぐそばに立っていたはずの彼すらも……否、彼の姿が見えなくなっていた。状況を理解できなくて頭の中がぐちゃぐちゃになり、視界がぼやける。

腰を抜かして怯えるだけのユーティアへ近づき、マーニがその場にひざまずく。骨ばった手がスカートの中に入ると、背筋が震えた。「いや、やだっ……どうしてよ、なんで……なんでこんなっ」

マーニが嫌な笑みを浮かべる。まくり上げられたスカートはすでにその証拠を晒していた。

「何故城に入れた？」

ふいにマーニの動きが止まり、見るとシルフがその後頭部にナイフを突きつけていた。

「さすがは魔法使いといったところですか。人の目を誤魔化すのは簡単ですよ、時間をかけて作り上げた名声があれば、なおさら」

と、マーニが瞬時にユーティアの背後へ回り、涙の伝う頬へその手を触れる。

「残念ですが、彼女はいただきますよ」

ユーティアには何がどうなっているのか分からなかった。とにかく頭が混乱して涙がやまないのだ。

シルフは何も返さなかった。――直後、冷たいマーニの手がユーティアの頬を離れた。低い呻き声がし、マーニが床へくずおれる。

「え……？」

呆然とするユーティアの耳に、会話が聞こえてきた。

「早かったな、ダリウス。急所は狙ってないだろうな？」

「ああ、大丈夫だよ。状況を理解せずに毒矢打っちゃったけど、一日もあれば目覚めるから安心して」

徐々に危険から救われた事を理解し、涙がついと止まる。

「あ、証拠の痣、初めて見た」

と、シルフの近くに来たダリウスがユーティアを見て言う。しかしまだ上手く反応することが出来ず、シルフが心配して声をかけてくる。

「大丈夫か、ユーティア？ もう敵はいないから安心しろ」

ユーティアはいまだに呆然とした顔で小さく頷いた。シルフはスカートをちゃんと下ろしてやり、その脚を隠す。

「他の二人には、サロンで吟遊詩人が誘拐未遂を起こしたと伝えてくれ。俺は先に彼女を部屋まで連れて行くから、詳しい話は後でする」

と、シルフは屈んでユーティアを抱き上げた。はっとしたユーティアは何か言おうとして口を開けるが、言葉が出てこない。

「了解。わざわざこんな時に事起こさなくて良いのになあ」

ダリウスの呟きを背にしてシルフは部屋を出た。

ようやく気分が落ち着いてきたユーティアは、だんだんと申し訳ない気持ちになってシルフを見上げる。

「あ、あの、ごめんなさい……」

シルフはこちらを一瞥し、素っ気無いが優しい言葉をくれた。

「気にするな。突然のことで驚いただろ？ あとは俺たちに任せておけ」

「……っ」

もう怖いものはなくなったのに涙が視界を埋めて落ちる。ユーテ
イアは小さく嗚咽しながら、ぎゅっとシルフにしがみついた。

「ギユスターに見られたらまずいな」

と、シルフは半ば冗談めかして言うだけだった。

第四章 密偵の可能性

ベッドで休んでいたユーティアは、ふと目を覚ました。

「気づいたか？ ユーティア」

心配そうな顔をしたギユスターが駆け寄ってくる。……あれから自分は泣き寝入りしてしまったらしい。

ふいに昼間の出来事が脳裏で再生されて不安になり、ユーティアは恋人に抱きついた。

「っ、ギユスター……！」

「ユーティア、もう心配するな。これからはさらに警備を強化して、護衛も二人で付くことに決まった」

優しい声がそう言っ、ユーティアは思わず顔を上げた。

「え？」

「そのままの意味だよ。護衛は二人いた方が心強いだろ」

と、ギユスターの後ろからダリウスの声がした。見るとそこにはシルフもいて、メイリアスもいる。

「あ、ごめんなさいっ」

それまで彼らの存在にまったく気づかなかったユーティアは、すぐにギユスターから離れると顔を赤くした。

「え、でもそれじゃあ、これからはギユスターと二人きりになれないの……？」

ふと浮かんだ疑問をぶつけると、ダリウスとシルフが同時に呆れた溜め息をつく。

「残念ながら、それは無理だな。ノアが言うには、ユーティア自身も油断しないように、いつでも身構えておけてことだ」

と、シルフが言う。馬鹿な質問をしてしまったと恥ずかしくなり、ユーティアは俯いた。

タイミング良く扉が開き、ノアが部屋に入ってきた。その後ろにいた小さな少年もとい克蘭ベリー王女が、たたたとベッドに

向かって駆けてくる。

「ユーティア！ ごめんね、大丈夫だった？ 怪我はない？ マーニが悪い奴だなんて、ぼく知らなかったんだ」

と、早口に言いながらギユスターを退かし、克蘭ベリーはユーティアの手をとった。

「わたしは大丈夫ですから、どうか謝らないでください」

と、ユーティアは克蘭ベリーの手を握り返して微笑んだ。

「良かった。ユーティアが危ない目にあっただけで聞いたから、すごく心配だったの。でも元気そうで安心したよー」

克蘭ベリーはそう言っただけで微笑む。

「気分は落ち着きましたか？」

と、寄ってきたノーアが克蘭ベリーの隣から声をかけてきた。

「はい、もう大丈夫です」

「それは良かったです。少し話をしたいのですが、よろしいでしょうか？」

と、克蘭ベリーの様子を伺う。

「……お仕事の話、だよ。うん、どぞどぞ」

と、克蘭ベリーはすぐにユーティアのそばを離れて行った。すかさずメイリアスが克蘭ベリーの相手を引き受ける。

「居合わせた人々への説明はすでに済ませましたが、幸いなことに闇魔法の影響による不調を訴える者は一人も出ていません。ユーティア、あなたはどうですか？」

ギユスターがただこちらを見ていた。

「……大丈夫、だと思います。頭も痛くないし、特に悪いところはありません」

「それなら良いのですが、もし何かあったらすぐに教えてくださいね。それと明日からは私とダリウス、シルフとギユスターの二人ずつで護衛をさせていただきます。あなたの気持ちは分かりますが、これもあなたを守るためなのです。どうか我慢なさってください」

群青色の瞳がまっすぐに自分を見据えていた。ユーティアは頷き、

疑問を口にする。

「ところで、さっきはどうして、すぐにダリウスさんが駆けつけてくれたんですか？ 普段は仕事で外に出ていると聞きましたが……」
がたとシルフが椅子を立った。軍服の胸に付いた石を取り外して見せる。

「俺たちには魔法石があるからな。これは闇魔法を感知すると、その情報が他の三人に伝わるようになってる」

一見するとただの飾りにしか見えないそれは、薄い緑色に染まっていた。ノーアの胸には赤い石が、ギユスターとダリウスのベルトにはそれぞれ青と黄の石がはまっていた。

「それで、たまたま近くにいたオレが一番に駆けつけたってわけ。この魔法石は軍が独自に作り出した物で、戦場に出る時はみんなが身につけることになってる」

と、ダリウスは言った。ユーティアが納得すると、シルフがまた口を開く。

「ユーティア、勝手にいじってしまって申し訳ないんだが、ペンダントの石を魔法石に変えさせてもらった。これには闇魔法を跳ね返す力があるから、これからは忘れずに毎日身につけてほしい」

と、近くに来たシルフが花形のペンダントを手渡す。それはヴィアンシュにもらった時とほとんど変化がないように思えたが、よく見ると中心の赤い石が前よりも透明になっていた。

「え、何それ。オレ聞いてないんですけど？」

「どういことだ、シルフ。許可は取ったのか？」

ダリウスとギユスターが驚いて言う、シルフは答えた。

「ああ、お前たちには話していないが、ノーアの許可はちゃんと取っている」

「ええ、数日前に許可しました」

と、ノーアも言つて、二人は仕方なく口を閉じる。

「分かりました、ありがとうございます」

と、ユーティアは顔を上げてシルフを見る。貴族のお洒落に夢中

で存在を忘れかけていたペンダント、自分を守る道具になつてくれてとてもありがたかった。

「いや、こっちこそ所有者の許可も取らずに変えてしまつて済まない」

と、シルフは言う、先ほどまで腰を下ろしていた席へ戻つた。

まだ不満そうにしているギユスターがユーティアのそばへ寄つて、ペンダントをその華奢な首に付けてやる。

* * *

「ミスター・オードもすごい人よねえ。魔法使いで博士号で魔法石の研究者で、出身はかの有名なオード家だね。憧れちゃうわ」
ユーティアの髪を丁寧に梳かしながら、メイリアスがふとそう言つた。

「そんなにシルフさんつて、すごい生まれなの？」

鏡越しに尋ねてみると、メイリアスは声を弾ませた。

「すごいに決まつてるじゃない。ユーティアは知らないでしょうけど、オード家は昔、今の王家に負けなくらい権力があつたのよ。それが数十年前に衰退して、それでも没落せずにどうにか貴族として生き残つてきたのがオード一族なのよ」

「それじゃあ、結構なお家なのね。他の人たちは？」

ペンダントを服の中に隠して、ユーティアはメイリアスを見る。

「ミスター・アデュートールは確か、元は隣国の貴族だつたつて聞いたわね。昔から魔法使いを多く輩出している家系だから、安定した生活をしてきたつていう噂よ」

左右の髪をそれぞれ三つ編みにして後ろで結わえる。

「ミスター・ファールバードはあれでしょ、まだ軍じゃなくて騎士団だった頃の騎士の一人で、功績を称えられて爵位を与えられたつていう。あまり権力はないけれど、騎士の家だけあつて剣の腕はさすがよね」

「じゃあ、ダリウスさんは？」

メイリアスは一度、口を閉じてから言った。

「今も昔も、代々続く公爵家として名高いわ。昔の当主が莫大な財産を築いたおかげで、働かなくても暮らしていけるんじゃないかって言われてる。……あたしの家とは大違い、まるで天と地の差ね」

ユーティアはふと不安を覚える。

「ダリウスさんのこと、嫌いなのか？」

振り返って尋ねると、メイリアスは気を遣って何事もなかったように笑う。

「そりゃあ、貧しい村で生まれた身としては恨めしいわよ。でも、彼が嫌な奴じゃないってことはよく分かってる。だからユーティア、そんな顔しないで」

「……うん」

それでも、何か言い知れぬ不安が心の中を渦巻いていた。

闇魔法の使い手は地下牢へ拘束されるのが決まりだった。その内の独居房にいるマー二を見て、ギユスターは言う。

「本名と出身地、今回の事件について知っていることをすべて話してもらおう」

マー二は相手が自分より年下であることに気付くと、

「お子様に話すことは一つありませんよ」

と、偉そうに視線をそらした。年齢だけで相手に甘く見られることはよくあったのだが、今回はかりは頭に來てしまう。

「さっさと吐け。でないと痛い目に遭わせるぞ」

と、ギユスターは腰に下げた剣の柄に手を触れる。マー二はその殺気に少し怯えた様子で答えた。

「……シャルヴィ・グッドオール、生まれはエルムトです」

「何故ユーティアを狙った？」

「最高神が、宿っていると聞いたので」

「どうしてそれが彼女だと分かったんだ？」

「それは……」

マーニが口ごもる。

「そう聞いたんです、あの方から」

「それは誰だ？」

「わ、分かりませんよ！ 私はただの吟遊詩人で、あの方とは数回しかお会いしていないんです」

怪しいな、とギユスターは思う。それでもユーティアの情報があちらへ漏れていることは確認できた。

「もし彼女を捕らえることができれば、どうするつもりだったんだ？」

「さ、さあ……私は別に、ただ退屈だったので手を貸したまでで情けない大人だと、ギユスターは思った。

「目的を知らないんじゃない、最高神の蘇らせ方も知らないんだな？」

「もちろんです」

マーニの言葉を信用するならば、きっとこれ以上の情報は得られないだろう。

「他に思い出したことがあればすぐに言え」

そう言ってギユスターはその場を離れた。

「密偵の可能性、ですか？」

真昼の日差しが庭に穏やかな風を吹かせていた。

「はい、大きな声では言えませんが、その可能性が出てきました。

昨日マーニは、すぐにあなたが神の宿り主だと分かったでしょう？

しかし、あの場にはたくさんの人たちがいました」

忙しく働く侍女たちを遠目に、ユーティアはのんびりと歩いていた。

「つまり、ユーティアを知る誰かが、君の外見をマーニに伝えただことだよ。でもこのことは、王家に関わる人間なら誰でも知りえることだから、密偵が誰かを特定するのは難しいな」

ダリウスがそう付け足し、ノーアがまた話を始める。

「侍女でも地位のある人はあなたの事を知っています。プリンセス・克蘭ベリーもあなたのことを気に入っているのです、そこから情報を手に入れたのかもしれませんが。どちらにせよ、どこから情報が漏れています。ストレスになるかもしれませんが、今後はむやみに他人と接触しないようにしてください」

「……はい、分かりました」

ユーティアは頷いて、密かに心の中で溜め息をつく。密偵なんて考えもしなかったし、本当に自分が大事な人間であることを、今更ながらに実感してしまつて嫌になる。

「まあ、今度また何かあつても、オレたちがいるから大丈夫だとは思うけどね」

と、ダリウスが励ますように言葉をくれた。「はい」と、ユーティアは強がつて笑顔を浮かべるが、ちゃんと笑えていない気がした。晴れた午後は太陽が眠気を誘う。さくさくと芝生を踏んで歩くと、風が花の香りを連れてきた。

「あの、ダリウスさん。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

白いベンチに腰掛けてユーティアが口を開くと、ダリウスが彼女を横目に見た。

「ん、何？」

ユーティアは少し言いにくそうにしてから問いかける。

「ダリウスさんは、メイリアスのことが好きなんですよね？」

動きを止めたダリウスに、ノアの好奇心に満ちた視線が突き刺さる。

「……」

はっとしてユーティアは手で自分の口を押さえた。この話題は今、口にするべきものではなかったらしい。

「あのなあ、ユーティア？　そういうのは、ノアがいない時に言ってくれ」

「そうですね、やはりダリウスは彼女のことが好きなんですね。以前から、そんな気はしていましたよ」

冷や汗するダリウスを無視するように、ノアがにっこり笑顔でそう言った。

「さあ、どうぞ遠慮なく続けてください」

「待てユーティア、こいつ実はいじめっ子なんだぞ。オレがいじめられなくなればやめてくれ！」

必死に先を言わせまいとするダリウスにユーティアは臆した。ノアがいじめっ子というのはこの様子から理解できていたが、ユーティアにはユーティアの好奇心がある。

「……えーと、その、好きになったのには、どんな理由があったのかなって」

「それなら私も疑問に思っていました。ダリウス、ここは素直に答えを返すのが紳士ですよ」

と、ノアまで言い出し、ダリウスが顔を真っ赤にさせて言う。

「っ、嫌だ！ オレは紳士じゃなくていい！ だから何も聞くな、特にノア！」

それでもノアはにこにここと楽しそうな表情を浮かべていた。

「おや、少なくともあなたは公爵家の子息でしょう？ 女性に対して、そんな言い方はないと思いますか？」

物言いは穏やかだが、威圧感がある。ユーティアはおろおろしながら「ごめんなさい」と、何度も口にしたが、手遅れだった。

すると、何かひらめいたダリウスがノアを睨んで言う。

「ノアこそ、プリンセス・クランベリーとはどうなんだよ？」

「どう、とは何ですか？ 特に変化はありませんが」

ユーティアは、ダリウスが何故、そんな質問をしたのか分からなかった。

「嘘つきめ、オレは知ってるんだぞ。プリンセスはノアにべた惚れじゃないか」

「ええ、そうですね。それであなたは何を言いたいんです？」

ノアの表情は崩れなかった。二人の会話についていけなくなつたユーティアは戸惑う。

「オレはだな、彼女の気持ちを――」

「あの、ノアさんとプリンセスとの間に、何かあるんですか？」
思いきってそう尋ねると、二人の視線がこちらを向いた。

「お二人は、家庭教師と教え子のはずでは？」

ダリウスが「あーあ」と、溜め息をつく。返答を待っているユーティアにノアは言った。

「その通りです。それ以下でも、それ以上でもないですよ」

と、いつもの微笑みを向けられた。何となく不自然な返答に思えたが、ユーティアはそれ以上のことは何も聞かなかった。

* * *

魔法使いの軍服は一般的な軍服とは異なる。どちらもなくすんだ緑色を基調としているが、シルフは立襟でギユスターのそれは折り襟だった。

「ノアは例外で、普通、魔法使いは参謀本部に配属されるんだ。

戦争が起きた時に備えて、その力を隠しておくのが目的らしい」

「じゃあ、シルフさんもその時は戦場に？」

「ああ、そうなるな。でも俺のやりたいのはそうじゃない。中でも魔法研究を専門に扱う部門があつて、俺はそこで魔法石の研究をしている。だから、ずっとそこで研究を続けていられれば、俺は満足なんだ」

勲章の数もギユスターと違う。魔法使いはその身を保証されている代わりに、あまり活躍させてもらえないようだった。魔法使いが肩書だけだと噂されるのも、きっとそのせいだろう。

「本当に好きなんですな、魔法石」

と、ユーティアが言うと、シルフは自嘲気味に言った。

「軍に入ったのもそれが目的だからな。元々俺は、戦うのは好きじゃないんだ。むしろ、人に喜ばれる仕事をしたいと思っている」

やっぱり彼は優しい人だ。そう思いながら、ユーティアは素直に

思ったことを口に出す。

「シルフさんには目指す物があるんですね、とっても素敵です」
するとシルフは少し目を丸くして、照れくさそうに視線をそらした。

「まあ、そうだな。だが、魔法石を研究している人間は俺を含めて数人しかいないんだ。成果が出なければ、いつ研究を止めさせられてもおかしくはない」

「でも、シルフさんのやろうとしていることは人を助けるものでしょう？ きつと大丈夫ですよ」

そう言ってユーティアが微笑むと、シルフの表情が和らいだ。

「現実はそのなに甘くないと言いたいが……ありがとう、ユーティア」

魔法使いになれる者が多くないことから、その存在は貴重なものだった。しかし魔法使いの多くが魔法に頼って戦闘するため、最低限の武術しか身につけないのが普通だ。

「あ、だけど、どうしてシルフさんはこの部隊に？」

ふと浮かんだ疑問をユーティアが口にする、シルフはきちんと答えてくれた。

「まず、最高神の宿り主を保護する場所として、この城の北棟が選ばれた。王族の住居であるここは、警備が厳重だからな。その次にここに入入りしてもおかしくない人間として『貴族』であることと、宿り主を守るのに最適な者が挙げられたんだ」

ユーティアが小さく首を傾げれば、シルフが言う。

「俺はオード家の次期当主、魔法石の扱いに長けているし馬車も所有している」

「……じゃあ、他の人たちは？」

「ダリウスは他の貴族よりも王家と面識があるし、遠くからでも戦闘に参加できる。ノーアはプリンセスと仲が良く、一級魔法使いとしての確かな実力を持っている。ギュスターは貴族というよりも、剣術を評価されてのことだろう」

と、シルフは部屋の隅にいるギュスターを見た。ユーティアもそちらに目をやって、なるほど頷く。

「……本当に選ばれた人たちなんですね。そういうのって、何だか素敵です」

ユーティアがにこつと微笑むと、シルフの胸が無意識に高鳴った。「ああ、そうだな」

それを何かの間違いだと自分自身に言い聞かせ、シルフはふいと視線をそらす。

蒼白い月が浮かんでいた。

誰もが寝静まった頃、人気のない廊下を一人の足音が支配する。それは少し慌てているようで、音の間隔がにわかに縮んでいた。

窓から差し込む月光がその頬を照らし、足音がふと止んだ。

「次に彼女を狙えるのは？」

低い声が辺りに響き、暗い大きな翼が視界の半分を埋める。

「……五日後の平日。記念日のために、街へ」

翼はふつと微笑むと、一枚の金貨を投げた。無機質な音がうるさく響き渡り、構うことなく翼は夜の闇へと羽ばたいて行く。

窓外に消えた姿をじつと睨んでいた。やがて床に落ちた金貨を拾い、冷たい瞳でそれを眺める。

再び走り始めた足音が廊下を行くと、夜がまた静寂に包まれていった。

第五章 シルフィネス

愛するギユスター様へ

あなたは気づいていますか？ もうすぐで、わたしたちが交際を始めて三年が経ちます。でも、今のわたしたちにそれを祝うだけの余裕はないですね。分かっています。けどわたしは、何かしたいなと思っています。それにその日はちょうど、あなたが護衛につく日なので。

最近わたしは、シルフさんと話が合うことに気がつきました。読書が趣味という共通点に加え、ミシュガーナのこともあって、わたしは意外と彼が嫌いではないと思えるようになりました。あ、誤解しないで下さい。元々、嫌っていたわけではないんです。ただ最初の出会いが最悪だったから、いまだにそのことを思い出すと、嫌になるというだけです。今ではその出会い方も不自然ではないと理解していますが、シルフさんは第二印象が気難しい人だったので、こうして仲良くなれたのは嬉しいです。

もしかして、嫉妬しちゃいましたか？ 大丈夫、心配しないで下さい。わたしにはあなたしか見えていません。いつでもあなたが一番だし、あなたのおかげでわたしは今も頑張つてやれています。二人きりになれないのは残念だけど、仕方ありませんよね。

ところで最近、ミシュガーナの体調が良くないらしいです。大事な友達なので、わたしは心配になるのですが、大丈夫なんでしょうか？ 今度、シルフさんに頼んでお家を訪ねてみるのも良いかな、と思います。でも、体調が悪い時に行ったら迷惑になるかもしれませんね。とりあえず今は、シルフさんから伝え聞くだけで我慢します。

それでは一日でも早く、平和になることを祈って。 イザヴェル城のユーティアより

* * *

「シルフ、ユーティアと初めて会った時、お前彼女に何をした？」
手紙から顔を上げたギユスターが、向かいの席でレポートを見ていたシルフへ問う。

「ああ、スカートをめくったな。先にあざを確認させてもらっただけだ」

と、シルフは彼を見た。

「……いきなり、か？」

「そうだな……あの時は焦っていたから、いきなりだった」

と、シルフはレポートを整えて引き出しへしまふ。ギユスターは溜め息をつくと言った。

「失礼な奴だな。他人の恋人なんだから、少しは考えてから行動しろよ」

ユーティアからの手紙を封筒へ戻し、一番下の棚へ丁寧にしまいこむ。

「そう言われても過ぎたことなんだから仕方ないだろ。それにあの時は、急な予言で慌てていたんだ」

「……だがシルフ、あまり彼女と仲良くなるなよ」

青い球状の魔法石を手にながら、シルフはギユスターを一瞥する。

「嫉妬か？」

ギユスターは一切反応しなかった。

「心配するな、俺にそんな気はまったくくない」

妙な空気が狭い室内を満たしていた。

* * *

白地に鮮やかな花柄のドレスだった。横髪を後ろでまとめた薄い黄色のリボンが、頭から少しはみ出ている。

「今日は気持ちよく晴れたのと、ユーティアが一番お洒落な格好をしたって言うから、こんな衣装になりました。どうです、紳士の方々？」

スカートの裾には細かくレースがあしらわれ、につこり笑うユーティアの笑顔がとても眩しかった。

「ワンピースじゃないんだな、動きにくくないか？」
と、ギユスターは言った。

「ううん、大丈夫。今日は街に出るんだから、うんとお洒落したかったの」

ユーティアはそう答え、シルフが口を開く。

「良いんじゃないか？ よく似合ってるよ」

につこり笑ったユーティアは少し照れながら返した。

「えへへ、ありがとうございます」

そして鏡に映った自分の姿を確認する。

この生活が始まってから幾度もドキドキさせられてきたギユスターだが、今日ほど嬉しそうな笑顔を見るのは久しぶりだった。

「靴もこの日のために注文した物なので、慣れないと歩きにくいかもしれません。そういう時は、ちゃんと気を遣ってあげてくださいね」

と、メイリアスがギユスターを見る。

「あ、ああ、そうだな」

ずっとにこにこしている彼女が可愛くて、二人きりであればすぐにでも抱きしめてやりたかったが、そうは行かないのが現実だ。

「ユーティアも気をつけてね。全部特別注文なんだから、汚しちゃ駄目よ」

「うん、気をつけまーす」

と、ユーティアはまた笑った。

恋人になって三年という節目、それがいかに大事であるかよく分からないと思った。

「今日は髪、結んできたのね。素敵だわ」

唐突にユーティアがそう言ってギユスターの腕をとる。

「ん、まあな……」

照れているのかそっぽを向いて返した彼に、ユーティアは言った。
「いつもよりもすっきりして見えるわ。ただ、前髪がまだ邪魔っぱいけど」

「ああ、時間がなかったんだ。髪を切るとなると、時間がかかるかな」

シルフは自分よりも背の低い彼の後頭部に目をやる。普段は毛先が肩に付いてぼさぼさの髪が、今日は茶色のリボンで一つに結わえられている。

「それなら仕方ないわね。でもこれからは、毎日結ったらいいと思うわ」

今朝見た時はただ珍しいとしか思わなかったが、それが彼女のためにしたことであると知ると、何だか妙な気分だ。シルフは前を行く二人から視線を外した。

「……そうか？」

ギユスターが遠慮がちに聞き返すと、ユーティアは微笑んだ。

「うん。だってギユスターが髪結んでるなんて、新鮮で素敵なもの」

「……分かった、そうしよう」

そしてギユスターが嬉しそうに口元を緩ませる。

街中に植えられた木々が緑を揺らし、その下を行く人々は誰もが明るい顔をしていた。春はいつだって人の心をそれぞれに喜ばせる。

「ねえギユスター、どこかでお茶しましょう」

あのお店なんて雰囲気良くない？ と、ユーティアは向かいの喫茶店を指さした。眩しい太陽がきらきらとその看板を照らし、ギユスターが言う。

「ああ、そうだな」

腕を組んで歩く二人が、妙に眩しい。道を横断し店へ入ると、上機嫌なユーティアが真っ先に注文をした。

向かい合う二人、間にシルフ。きっと今の彼女にはギユスターしか見えていないのだろうが、変な気分だった。

「ギユスターが貴族なのに頭悪いって、年上の子たちにかかわれたことあったよね。そしたら、ギユスターが木の棒で彼らをやっつけちゃって、わたし本当はあの時から気になってたんだー」

「ああ、そんなこともあったな。あれは、お前たちが彼らにいいめられないようにと思ってしたことだ。数年後にはよくつるむ仲間になつてたがな」

「ええ、そうね。村のみんな、今頃どうしてるかしら？　きっとヴィアンシュたち、寂しがってるだろうなあ」

「そういえば、両親に手紙書いたんだろ？　返事はまだなのか？」

「うん、まだ来てないの。きっとわたしがいなくなったから、みんな忙しくしてるのね」

ユーティアが服の上からペンダントに触れた。大事な友人からの贈り物、故郷を思い出させる唯一の物なのだろう。

店を出た後、適当に街を歩いていたら。楽しそうにはしゃぐ二人を眺めながら、シルフはふとはぐれてしまいたくなる。――他人のデパートに付き合わされるのが、これほど辛いとは思わなかったな。

「……シルフさん、聞いてました？」

はつとして我に返ると、ユーティアがシルフを見ていた。無駄な動悸が体温を上げて、とりあえず詫びの言葉を発する。

「悪い、聞いてなかった」

ユーティアは少し口を尖らせると言った。

「諦めが肝心だっていうことですよ。シルフさんもそう思うでしょう？」

と、また笑顔を浮かべる。――ああ、きっと彼女に嘘はつけないな。

「ああ、そうだな」

ギユスターが何か反論したが、シルフにはよく聞こえなかった。大通りへ出ると、一気に人が増えたように感じられた。平日だと

いうのに、多くの人が行き交っている。

ユーティアはギユスターにしがみつくようにして歩いていた。人とぶつからないよう配慮しているためか、歩きづらそうだ。

ふいに、誰かがユーティアにぶつかった。

「きゃっ」

彼女がバランスを崩してギユスターに支えられる。謝りもせずに通り過ぎるとはなんて礼儀のない奴だ、とシルフが思った時、ユーティアが声を上げた。

「っ、ペンダント！」

はっとして彼女の首元に目をやると、服の下に隠した鎖が消えていた。その価値を一番よく理解しているギユスターが、こちらを見te言う。

「シルフ、ユーティアを頼んだ！」

と、盗人の消えた方へ走り出す。

「……どうしよう、大事な物なのに」

先ほどまでの笑顔が嘘のように、ユーティアは今にも泣きだしそうな顔をする。シルフはそんな彼女の手をとると、人込みから抜け出して横道へ入った。

「心配するな、ギユスターのことだからすぐに取り返して来るさ」

ユーティアは頷いたが、まだ不安げだ。

シルフはきよきよと周囲を見回して安全を確認した。ペンダントを失った今、闇魔法に襲われたら大変だ。それでなくとも、今の彼女は立派な貴族に見える。金目の物を持っていると勘違いされては、もっと困る。

「——シルフさん、何か聞こえませんか？」

ふと顔を上げたユーティアがそう言い、シルフは耳を澄ませた。

……何か大きな物が地面を這いずるような音がする。

「……し、シルフさん」

怯えるように言った彼女の視線の先には、闇が広がっていた。どうして嫌な事が現実になるのだらうと思ったが、すぐに彼女の手を

とって道へ出る。

——遅かった。そこにはすでに闇の空間が形成されていた。真つ暗な闇色に世界が染まり、存在することを許された者だけが空間上に立つ。

「どこだ、術者はどこにいる」

震えるユーティアの手を強く握り、捕らわれないように抱きしめる。だが、彼女から荒い息遣いが聞こえてはつとした。

「ユーティア？」

闇魔法が彼女の身体に侵入しているようだ。シルフはすぐに自分のペンダントを外して彼女に渡した。

「大丈夫だ、一定時間なら守られる」

と、彼女を地面へ座らせる。乳白色の魔法石が不思議な光を放し、闇魔法からユーティアを防御していた。

「わざわざ狙ってやってるっていうのに、用意の良い学者さんだね」

すぐさまシルフが自分自身に防御壁を張ると、ふいに上方から声がした。

「ごきげんよう、オード家の坊ちゃん。そして最高神の宿り主よ」

小柄な女性が二人を見下ろしていた。

「あたしを憶えてる？ 小学校の時同じクラスだった、イズンだよ」と、女性がふわりと下へ降りてきてにつこり笑う。シルフは目を細めてその姿を確認したが、すぐには思いだせそうになかった。

特徴的なのはふわふわの赤毛と、大人のようにも子どものようにも見える外見だ。だが、印象には残りそうにない。

「頭だけで軍人になったあなたのこと、どうせ戦闘能力は大した物じゃないんでしょ？」

イズンが一步一步とこちらへ寄り、シルフはとっさに身構える。

武器は護身用のナイフだけ、構えは魔法使いのそれである。

「さあユーティアお嬢様、あたしたちと一緒に行きましょう」

と、イズンがユーティアに向かって手を伸ばすが、魔法石の力に

跳ね返されてしまう。

「……素敵なお守りだね、闇を全部跳ね返してる。でもあなたが倒れてしまえば、それも意味ないわ。ラティ・ノート」

大小の見えない石が、シルフの身体にぶつかってくる。じわりと闇に侵されていくのが分かった。

鈍い痛みを堪えながらイズンを睨む。どうやら敵はそれなりの実力者らしかった。——ならばこちらも。

「エオー」

重たい空気の刃が小柄なイズンを切り裂く。避けようとせず、ただ翻弄された彼女はシルフへ向き直り、また笑顔を浮かべた。

「ギューフ・フェンリル・ノート」

煙のような白い狼が現れてシルフに襲いかかる。とっさにそれを避けると、狼がうずくまっていたユーティアに噛みつきうとした。

本来の狙いがそちらであると気づいた時には遅く、かろうじて魔法石がユーティアを守っていた。

「ハガル」

すぐに召喚消去魔法で狼を消し、再びイズンに目を向ける。

「んー、やっぱり魔法使いは違うねえ。でもその程度じゃ勝てないわよ？」

そう言ってイズンは三度目の魔法を唱えた。

「カノ・ノート」

瞬間、炎が自分を取り囲む。

「ウル・ラーグ」

小規模な嵐で炎をかき消すと、イズンがいつの間にかユーティアのすぐそばにいた。

「あらら、うなされてるようだね。魔法石ももう限界かしら？」

「っ、エーギル」

大量の水流がイズンをユーティアから離し、立ち上がったイズンはまた言う。

「彼女、ずっと恋人の名前呼んでるけど」

「だから何だ？ 俺には関係ないことだろ！」

シルフがそう返せば、イズンがにつこり微笑んで。

「あたしには、人心が読めるんだよ」

「！」

唐突に脳裏で記憶が蘇った。確かに会ったことのある人だ。人の心が読めるからといつも他人を避けていた——イズン・ノッド・セアーズ。

「可哀想に。あなた、自分の本心を認めない気なのね？」

むちゃくちゃに魔法を唱えて相手を黙らせたい衝動に駆られるが、シルフは冷静に自分の胸に付けた魔法石を見やる。石から発される青い光が強さを増していた。

「——ニイド、グローイ」

それは能力低下魔法と光の合わせ技だった。大きな白光が空間いっぱいに広がって、あらゆる能力が半減し、その隙にギユスターが中へ飛び込んでくる。

「っ……！」

イズンがその気配に気づいた直後、剣を手にしたギユスターがその背中を斬りつけ、闇魔法は瞬時に途絶える。

地面に倒れたイズンは気を失っていた。

「よく保ってくれたな」

と、ギユスターがシルフを見る。仲間が近くにいたからこそその光魔法だった。空間を切り取る闇魔法は外からの侵入を受け入れないが、一時的に光で満たしてしまえば第三者も中へ入り込める。

「いや、それよりもユーティアが心配だ」

シルフの魔法石を手にしたユーティアも、すっかり意識を失っていた。

第六章 彼女

「やはり最高神が宿っているせいで、人よりも闇魔法の影響を受けやすいようです。しばらく静養していればすぐに体調も良くなるでしょうが、この状態で再び闇魔法に触れたら、彼女の命に関わるかもしれません」

ユーティアに侵入した闇を出来るだけ光で除去したノアが、神妙な顔でそう言った。

「さすがにそれはあちらも望んでいないでしょうが、油断は出来ませんよ」

眠り続ける彼女にギュスターはずっと寄り添っていた。

「あいつら、俺がユーティアと二人になった時だけを狙っています。どうやら、俺が実戦向きの人間ではないと考えているようです」

と、シルフは口を開いた。丁度メイリアスが夕食の支度をしに部屋を出ていた。

「まあ、確かにシルフは武術できないよな。魔法石扱わせたら、誰も勝てないと思うけど」

ダリウスがそう相槌して、ノアがふと立ち上がる。

「では、その隙を作らないように編成しなおしましょう。シルフに抜けられては困るので、彼女が外出する際は私たち三人の内、二人でつき、室内にいる際はシルフに加わっていただく、というのでどうでしょう？」

「でもノア、そうしたら順番に回せなくなりますよ？」

ダリウスの口出しにノアはうろつろと辺りを歩き回る。

「……では、これからは外出を禁止しましょう。何が起こるか分からないので庭へ出るのも制限し、護衛は今までどおり二人で行います。本当はあまり厳しくしたくないのですが、止むを得ません」

ギュスターの取り返してきたペンダントがユーティアの胸で光を反射していた。

「もうひとつ気になる事があります。俺たちがイズンに襲われる前、彼女のペンダントが何者かに盗まれました。それを偶然ではないと考えるなら、やはり密偵の可能性が濃くなると思いませんか？」

シルフはずっと考えていたことを口にし、全員が押し黙る。あのペンダントに魔法石が付いている事を知っているのは、それを彼女へ渡した時、部屋に居合わせた人物だけだ。

「まさか、プリンセス・克蘭ベリーだったりしてな」

苦笑いでダリウスがそう呟くと、ノーマが反応した。

「ありえないと言いたいところですが……彼女も精神的にはもう大人ですからね。何か目的があるのであれば、可能性がないとも言いきれません」

「だが、メイリアスの可能性だってある」

と、シルフが言っていると、ダリウスがとっさに反論した。

「どうして彼女が？　メイリアスはオレたちが指名した侍女なんだから、そんなわけないだろ」

言い終えると、ダリウスはノーマの視線を感じて苦笑いを浮かべる。

「そんなにむきにならないでください。いくら彼女に好意を寄せていても、決めつけるのは危険ですよ」

いじめっ子の表情がダリウスを見つめていた。察したシルフが淡々と言う。

「ああ、やっぱり彼女が好きなのか。だが密偵の可能性は捨てきれないんだから、下手に庇うな。相手は何を考えているか、分からないだぞ」

ダリウスは不機嫌に舌打ちをした。笑っていたノーマが、ふと真剣な顔をして言う。

「……一番嫌な展開ですが、私たちの中に裏切り者がいる、という可能性は？」

「それなら、俺は疑われる余地がありませんね。わざわざ自分も一緒に狙わせて、怪我すると思いませんか？　それに二度ですよ」

と、シルフは返す。

「オレだってそんなの無いと思うなー。だいたい、最高神がどうと
かっていうのも、つい最近知ったことなんですよ？」

ダリウスもそう返し、ノアがギユスターを見る。

ギユスターはユーティアから目を離して、三人を振り返った。

「ずっと遠距離で辛い思いをさせてきた恋人を、これほど危険な目
に合わせる彼氏がいいますか？」

そして視線はノアに集まった。

「私だって疑われる余地などありませんね。ただでさえプリンセス
の家庭教師に軍務、敵方の情報集めにユーティアの護衛、と、毎日
予定がたくさん入っているんです。闇魔法との繋がりなんて築けま
せんよ」

もし克蘭ベリー王女と共犯だったら——と、三人は考えたが、
誰も口にはしなかった。

* * *

光の当たらない部屋だった。地下の牢獄で、もつとも深く冷たい
独居房にイズンは監禁されていた。

「お嬢さん、知ってること全て話してくれませんか？」

と、面倒くさそうに問いかけて来た茶髪の青年に、イズンは言う。
「今はまだ嫌だね。話しても話さなくても、罰は変わらないんでし
よ？」

床にはめ込まれた魔法石のせいで魔力が封じられていたが、彼女
は強気だった。

「あー、まあな。でもお嬢さん可愛いから、素直に吐けば少しは軽
くなるんじゃないか？」

と、ダリウスは大きなあくびをする。

本心ではないと分かっているけど、イズンにとっては抵抗を覚える
台詞だった。

「じゃあ、ミスター・オードを出してくれない？ 彼になら全て話すわ」

「……お前も恋する乙女か？」

イズンは反応しなかった。椅子を立ったダリウスはのんびり歩き出し、出口付近で待機していたシルフを呼ぶ。

「シルフ、ご指名だぜ」

と、奥の檻を指差した。シルフは溜め息をついてからそちらへ向かう。

イズンは壁に背を預けて待っていた。

「何だ？ さつさと吐いてくれないと困るんだが」

シルフはそう言いながら椅子に腰掛ける。イズンは目を合わせることもなく言った。

「あんた、あの子のことが好きなんだね」

シルフは答えなかった。

「お前らの目的は何だ？ 最高神を復活させてどうするつもりだ？」
「でも彼女には恋人がいる。可哀想なあんたに、良いことを教えてあげるよ」

空気が悪いのをシルフは感じた。窓がないからだろうか、息苦しい気がする。

「あの方が一番恐れているのは彼だ。若さと能力のバランスが、あんたらの内の誰よりも優れている。間違いない、彼が盾だ。あの方は絶対に彼を殺すよ」

「そんな情報は欲しくない。俺の質問に答えろ」

遠い目がこちらを見た。

「あんた、喜んでるね？ これだから人間は怖いんだよ」

にやりと笑うその顔が怖くて、シルフは口を閉ざした。人心が読める彼女には何を言っても無駄らしい。

「それとも、このまま彼女に想いを伝えずに辛い思いをし続けるかい？ 彼女を奪うチャンスは一度しかないよ」

イズンの声が狭い空間を跳ね返って重く響く。――相手の口を封

じてやりたい。これ以上、余計な事は聞きたくない。

「いつまでも隠しているのは辛いでしよう。自分の思い通りにならない世界は、何よりも恐ろしい。それなのに、素直になっちゃえば気分は楽になるっていうのに、あんたは何もしないでいるつもり？ 彼女の生きている今だからこそ、やれることをやるべきじゃないか？ あんたは臆病だ。他人の気持ちも考えずに自分までも騙し続けて、本当にそれで良いと思っっているのかい？」

気持ちが悪くなる。今も彼女にずっと付き添っている彼の姿が、彼女の明るい表情が脳裏をめぐって吐き気を覚える。

「精神的な攻撃はもう止してください」

ノーアの声が耳に届いてはっとした。

イズンが悔しそうに舌打ちをする。

「シルフ、後は私がやるので少し休んでてください。ちゃんと気を落ち着かせて、くれぐれも冷静な行動を」

と、肩に手を触れられ、シルフは立ち上がった。

「……っ、すみません」

そう返し、シルフは足早に出口へ向かう。途中でダリウスが声をかけようとしたが、何も言えずにその背中を見送った。

* * *

気分が悪かった。目を覚ましたはずなのに頭が重い。

「おはよう、ユーティア。気分はどう？」

メイリアスの声がしてそちらを見上げる。

「頭が痛いわ……気持ち悪い」

心配そうな表情でメイリアスはユーティアを見た。

「今日は起き上がらない方が良さかもしれないわね。熱っぽくはない？」

ユーティアは頷いた。

「じゃあ、ゆっくり寝ていればじきに良くなるわよ。きつとまだ、

闇があなたの中に残っているんだわ」

「ぼーっと新しい記憶を思い起こしながら、ユーティアは今の状況を理解する。ペンダントを盗られて闇魔法が自分を……。」

「そうだ、ペンダントは？」

「はっとしてユーティアはメイリアスを見た。」

「大丈夫よ、ちゃんとここにあるわ」

「と、メイリアスがユーティアの首にかかったペンダントを持ち上げる。それを見て安心したユーティアは微笑み、その後はどうなったのだろうと疑問に思った。」

「今日は誰と誰が護衛なの？」

「ミスター・アデュートールとダリウス様よ。もうすぐ部屋に戻ってくるわ」

「……今日って、何日？」

「そう尋ねるとメイリアスは答えた。」

「三月と十三日目よ。あなた、この二日間はずっと眠ってたわね」
「ユーティアは驚いたが、それをどう表せば良いのか分からずただ茫然としていた。」

扉が開くと、久しぶりに見るミシュガーナの姿がそこにあった。

「ミシュガーナ！」

「予想外の来客にユーティアは思わず驚いてしまう。ノアとダリウスも一緒に戻ってきたのを見ると、どうやら二人は車椅子の彼女を迎えに行っていたらしい。」

「ようやく目覚めたようですね」

「と、ノアが呟くと、ミシュガーナがベッドのそばまでやってきた。」

「話は聞いたわ、ユーティア。何だか大変なことになってるわね、身体はどう？」

「心配そうな表情でそう問われ、ユーティアは言う。」

「今日一日ゆっくり寝ていれば平気よ。それより、あなたの調子は」

？」

ミシュガーナがにこつと微笑んだ。

「私はもう大丈夫よ。他人の心配はしないでいいから、自分を心配なさい」

「あ、うん……」

そして方向を転換したミシュガーナは、椅子に着いたノーアとダリウスに向かい合う。

「さっそくですが、私の予言は当たりましたわ。ユーティアは二度の危険にさらされましたが、その結果は私には見えていました」

と、ミシュガーナはノーアを見た。彼女が部屋を訪れたのは、彼らと話をするためでもあったようだ。

ユーティアはベッドの中で耳を澄ませた。

「そうでしたか、ミス・オード。しかし、結果に関する予言を私たちには教えてくれませんでしたね、何故です？」

「その必要がないからです。私はあなた方を信用しているし、結果を伝えることで、あなた方が少しでも油断してはいけないので」

一人の予言者として彼らと話をしている声は、立派な大人の声だった。十五歳の少女にはとうてい思えない。

「なるほど。ですが、今日はそれを伝えるためだけに来たのではないでしょう？ 本題をお聞かせ下さい」

ノーアがそう言つと、ミシュガーナはしばらく間を置いてから言つた。

「近くに闇魔法と繋がっている者がいます。その者自体に力はありませんが、これまでとは比べ物にならないほどの危険が迫りつつあります」

「やはり密偵が？」

「ええ、それが誰かまでは分かりませんが、確かに近くにいますわ」
ユーティアは小さく溜め息を漏らした。自分の近くに密偵がいるだなんて、考えたくなかった。

「ありがとうございます、ミス・オード。余裕があれば、こちらで

も調査を進めていきましょう」

と、ノーアは言った。

「いえ、私にはこれくらいしかできませんから。それにこれは、大切な友人のためでもあるので」

ミシユガーナが少し微笑み、ユーティアの心が弾む。大切な友人という響きがとても嬉しかった。

「話は以上ですか？」

「はい、今はこれだけです。また何か見えたら連絡しますわ」

そして車椅子を動かして彼女が再びこちらへやってくる。ユーティアがにつこり微笑んで待っていると、ミシユガーナがきよとした顔をした。

少女たちの話し声が聞こえるだけの室内で、ダリウスがふいに呆れた声を出す。

「嫌ですね、密偵だなんて」

ノーアは彼を見ずに返事を返す。

「そうは言っても仕方ないでしょう。ミス・オードの予言能力は本物です、一度だって彼女の予言が外れたことはないんですよ」

「……まさに天才、ですね」

と、ダリウスが言くと、ノーアはどこか苦い顔で口を閉ざした。

* * *

「メイリアス、まさかお前じゃないよな」

仕事を終えて自室へ戻ろうとしていた彼女を、ダリウスは待ち伏せしていた。

「ダリウス様……密偵のことですか？ もちろんあたしじゃないですよ」

と、足を止めたメイリアスは再び歩き出そうとして、

「その言葉遣い、やめろって何度も言っただろ」

ダリウスの真面目な声に動きを止めてしまう。髪をまとめていた

帽子を脱ぐと、色素の薄い赤毛が胸の辺りまで落ちた。

「……あたしのこと、疑ってるの？」

ダリウスはただ壁に寄りかかっていた。

「まあ、あなたたちの話を聞いていると、あたしが疑われるのも無理ないわよね。だけどあたしは、闇魔法の奴らに協力なんかしないし、したいとも思わないわ」

そうメイリアスが言うと、ダリウスが口を開いた。

「お前を疑っているわけじゃない。信じたいから聞いたただけだ」
静寂が通り抜けていく。

「別に信じてもらわなくて結構よ。世話役の侍女であるあたしが、一番疑わしいもの。……分かってるのよ」

地味なメイド服に彼女の髪が揺れる。どこからか吹いてくる風が、メイリアスを揺らがせていた。

「オレはお前がそんな奴じゃないって信じてる……メイリアスは裏切るような奴じゃない」

そしてダリウスは彼女とすれ違い、廊下を去って行った。

第七章 満月の夜

親愛なるシルフィネス様へ

突然のお手紙、申し訳ありません。誰かに伝えたいことがあったのですが、誰にするか迷って結局あなたに決めました。

わたしは神の宿り主と呼ばれていますが、別名に「フリーアの娘」というものがあるそうですね。この前、ミシユガーナが教えてくれました。わたしの中には神様が宿っていますが、それは女神フリーアに選ばれた証であり、そこから「フリーアの子、フリーアの娘」という呼び名が付いたそうです。ですが、わたしにはむしろこの名前の方がしっくりくるような気がします。最高神アルファズルは自ら人間界に下りたのではなく、女神が彼をこの地へ下ろしたからです。そしてそれが今、わたしの中に宿っている……。

この前、闇魔法に襲われた時、わたしは意識を失うまでに感じたことがありました。わたしの魔力は平凡の域を出ませんが、あの時自分の中にある光の力が闇に染まっていくのを感じたのです。それは元からある魔力のことではなく、もっと奥深くにあるものでした。その自分の中心とも言える部分に闇が入り込んできた時、わたしはあまりの息苦しさに気を失ってしまいました。どう表現したらいいのか分かりませんが、わたしは確かに最高神を見た気がしました。闇魔法は自分でも見えないところに眠っている彼を、その力で無理やり起こそうとしているのではないのでしょうか？

わけの分からないことを長々と書いてしまい、申し訳ありません。
ユーティア・サルヴァより

* * *

「シルフさん、これ、後で読んでください」

ある夜、ユーティアはそう言ってシルフへ白い封筒を差し出した。

「手紙……？」

と、いぶかるシルフに、ギユスターが睨むような視線をよこす。恋人の様子に気づいたユーティアは慌てて言った。

「あ、大したことじゃないんです。ギユスターには話しても分かってもらえない気がただけで、特に深い意味はないの」

そしてそれを受け取ったシルフは言う。

「……そうか、分かった」

自分が一般的な人間でないことは理解しているつもりだった。しかし改めて自分自身に向き合って見ると、どうしても前向きにはなれない。

最高神のこと、女神のこと、自分の運命のこと……闇魔法のこと。考える事柄が多すぎて、何も考えたなくなる。けれども思考は心を無視して働き続ける。

「……ユーティア？ そろそろ上がらないとのぼせるわよ」

扉の向こう側で、メイリアスがユーティアを気遣ってそう言った。ユーティアは「うん」と小さく返事したきり、浴槽から身体を出そうとしない。

手の平にすくった熱い水がゆらゆらと揺れている。それを水面から浮かせると、手からその温度が逃げていった。——わたしの中にある光も、水のようにたやすく闇に落ちてしまうのかしら。

「ねえ、ユーティア。……明日は満月よ。あたしが話をつけてあげるから、一緒に見に行かない？」

蒸気の満ちた浴室にメイリアスの声が響く。

「あなたにはペンダントがあるから、少しの時間ならきつと許されるはずよ」

そのペンダントすらもいつかは無力になってしまふ気がして怖くなった。

ふと右腿の痣を掻き篸りたい衝動に駆られたが、思い留まる。そんなことをしても痣は消えないし、自分の中にはすでに最高神が宿

っているのだ。今更変えられる現実など、どこにも存在しない。

「……聞いてる、ユーティア？」

扉を叩く音がしてユーティアは我に返った。

「ええ、聞いてるわ」

慌ててそう返すと、メイリアスが呆れた風に溜め息をつくのが分かった。

「もう、とりあえず上がりなさい。のぼせちゃう前に」

と、メイリアスが扉を開けて顔を覗かせる。

「あ、うん。すぐ上がるわ、だから大丈夫っ」

手振りでメイリアスの仕事を止めさせ、ユーティアは彼女がまた扉の向こうへ消えるのを待って浴槽を出た。

頭が少し熱っぽくなっていた。水滴を散らしながら着替えを終えるまで、ユーティアはまた思考が後ろ向きになっているのを感じた。

——きつと気分転換が必要なんだわ。そう、何も無い毎日に飽きないはずがないもの。

「明日の満月、ちゃんと見に行くわ」

そう言いながら扉を開けると、メイリアスが不思議そうな顔をしていた。

* * *

外出を禁止されたユーティアを気遣ってか、克蘭ベリーが部屋を訪れた。

「ユーティア、ごきげんよう」

いつもの口調で挨拶する克蘭ベリーに、ユーティアはにっこり微笑む。

「ごきげんよう、プリンセス・克蘭ベリー」

ノーアとダリウスがそれぞれに彼女たちを見守っていた。

すぐさま克蘭ベリーは読書をしていたユーティアに近づき、それを横から覗き込む。

「何の本読んでるの？」

「光魔法に関する本です。シルフさんが読んでおけ、と、貸してくださいました」

克蘭ベリーは興味がない様子で適当に相槌を打つと、ユーティアへ言った。

「そんなことより遊ぼうよー。今日はぼく、たくさんおもちゃを持ってきたんだ」

と、付き添いの侍女が抱えた袋を指差す。

「おもちゃ、ですか？」

ユーティアはすぐに本を閉じると立ち上がった。克蘭ベリーが侍女から袋を取り上げて床へ座り込み、中身を出していく。

「これが昔お父様にもらったお人形で、これが新しい鉄道模型ですよー、それでこれがぼくの宝物の――」

克蘭ベリーの隣に座りこんだユーティアは、初めて見るおもちゃの数々に早くも心を奪われていた。端正な顔立ちの少女の人形を手にとり、まじまじと眺める。

「ノーア、もしプリンセスが密偵だった場合、あのおもちゃには何か意図がありますよね」

ふと呟くようにそう言ったダリウスに、ノーアは視線を向けた。

「一人を疑い出したらきりがありませんよ。あまり疑心暗鬼にならないで下さい」

ダリウスは黙ったがその疑いが消えることはなく、ただ二人は複雑な気持ちで楽しそうに遊ぶ少女たちを見つめていた。

ユーティアの、普段他人には見せない子どもっぽさがありりと晒されていた。金髪碧眼の人形の服を脱がして、別の服を着させる。それを見て克蘭ベリーも笑った。

「まるで姉妹のようですね、あんなに楽しそうな彼女を見るのは初めてです」

「まあ、確かに。でもあれは姉妹というか、むしろ一緒に遊んでますね」

そんな彼女たちを眺めていると、今自分たちの直面している危機が夢か何かに思えてくる。目の前にある素敵な時間がいつまでも続けば良いと、その場にいた誰もが考えていた。

「もしオレたちが負けたら、彼女を失うかもしれないんだな……現実から逃げたくなるよ」

小さすぎる声だった。ダリウスの言葉を聞き取れずとも、その意図するものを感じてノーアは言い返す。

「みんな同じ気持ちですよ。一番辛いのは当人でしょうが、ギユスターもまた、大変辛い思いをしているはずですよ」

それはきつと、ユーティアの安らげる数少ない時間でもあった。だからこそ、なおさら強く願ってしまう。——どうか、普通の少女に平和な人生を。

夕食を運んでいる途中、メイリアスは少しぼーっとしていた。暗さを増し始めた夜空に蒼い満月が浮かんでいた。

ポケットの中がふいに重くなった気がして立ち止まる。誰もいない廊下で、メイリアスは頭を振って気分を変えた。

「失礼します、夕食をお持ちしました」

と、来客が帰ってすっかり静かになった部屋に入る。

読書の続きをしていたユーティアは、きりのいいところまで読んで本を閉じた。棚にそれを置いてから、席へ座る。

いつものようにてきぱきと机に食事を並べる彼女を見ていた。ノーアとダリウスも席に着き、メイリアスが全ての皿を出し終える。

「ユーティア、あの本はちゃんと勉強になっていますか？」

「はい、とても興味深いことばかりですごく勉強になります。あともう少しで読み終わるんですけど、とても良い知識になります」

ユーティアはノーアの質問にそう答え、メイリアスが丁寧に紅茶を淹れた。

「それは良かったです。シルフがどのような意図で貸したのかは分かりませんが、きつと彼も喜んでいますよ」

三つのカップがそれぞれの前に渡され、メイリアスが後ろへ下がった。

一ヶ月以上もこの城内で暮らしているユーティアは、王家の食事にももう慣れていた。前のようにどきまぎしながら落ち着かない食事をすることも、料理の美味さに感動することも少なくなっていた。ギユスターの教えのおかげで礼儀作法も完璧だ。

紅茶を飲もうとしてノーアは顔を顰めた。そして何を思ったのか、口をつけずにカップを戻してしまう。彼はその後、ちらりとダリウスを一瞥した。その一部始終を見ていたユーティアは、何だか嫌な予感がした。

皿の上が空になると、メイリアスがすぐに片付けを始めた。相変わらず満足させられる味だと思いながら、ユーティアは口を開く。

「あの、ノーアさん、何かあったんですか？ 全然紅茶に口つけてなかったようですが」

「いえ、何でもありませんよ。気になさらないで下さい」

と、ノーアは首を傾げる彼女へ返す。それでも何かあると思えて仕方なかったユーティアは、また後で尋ねてみようと思う。

片付けを終えたメイリアスが部屋を出て行き、ダリウスが眠たそうにあくびをする。

小棚の上に置いた本を手に取り、ベッドへ腰掛ける。――考えていたって答えが出ないのだから、今は他の事を考えよう。ユーティアは本の続きを開き、読書に集中することにした。

メイリアスが部屋へ戻ってくる頃には、退屈に耐え切れなかったのかダリウスが居眠りをしてしまっていた。

「ミスター・アデュートル、彼を注意しなくていいんですか？」

と、メイリアスがノーアへ問うと、どこか冷たい返事が返ってきた。

「連日の疲れが溜まっているのでしよう、たまには許してあげるのも悪くありません」

メイリアスは意外そうな顔をしてユーティアの方へやってくる。

「大変ね、彼らも。ところでもう本は読み終えたの？」

ユーティアは閉じた本の表紙を見つめて言った。

「うん、すごく勉強になったわ。退屈しのぎにもなったし、シルフさんには感謝してる」

そしてメイリアスは時計を確認し、口を開いた。

「ユーティア、今日は満月よ。まだ就寝時刻まで時間があるし、一緒に見に行かない？」

「あ、昨日の話は本当だったのね。うん、行くわ」

と、ユーティアは本を小棚の上へ置いた。こちらを眺めているノアにメイリアスが話をしに向かう。

「ミスター・アデュートル、これからユーティアと満月を見に行きたいんですけど、よろしいでしょうか？」

すると珍しくノアは笑わなかった。

「満月ですか、感心しませんね」

メイリアスの肩がぴくりと震えた。そのすぐ後ろでユーティアが首を傾げる。

「あなたはユーティアが闇に侵されやすいことを知っているはずですよ」

腰を上げ、立ち上がったノアが眼鏡越しにメイリアスを睨みつける。

「残念ですが、彼は騙せても私は騙されません。『睡眠薬』には慣れているのでね」

相手を威圧する口調だった。

『睡眠薬』の言葉にはっとしたユーティアがメイリアスを見る。

メイリアスは言った。

「ごめんね、ユーティア」

その言葉の意味するものに、ユーティアは悲しみが込み上げる。

そしてノアがその細い腕を掴もうとした一瞬早く、メイリアスはユーティアの首にかかったペンダントを力任せに取り上げて逃げだした。

「メイリアス!？」

彼女を捕らえ損ねたノーアは立ち尽くすユーティアへ言った。

「私から離れないで下さい!」

すぐさま後を追って廊下へ出る。――親友と言えるくらい近くにいた彼女が密偵だなんて、信じられなかった。

メイリアスは走りながら予定が狂ったことを苦く思っていた。本来なら上の階へ移動するはずだったが、これでは自分の体力がそこまで持つてくれないだろう。――それならせめて、窓のあるところまで……!

「あ」

足がもつれた。床へ転んだメイリアスの手から、ペンダントがすり抜ける。見ると後方には彼らが迫ってきていた。

「――ハティ! ヴアナ・ド・ハティ!」

とつさにメイリアスが声を上げると、数メートル先にあった窓ガラスが派手な音を立てて割れた。

「君にしては上出来だね。こうなることは予想していたよ」

先を行っていたノーアが立ち止まり、追いついたユーティアも足を止めてその姿を確認する。

それは月光に照らされて白々と輝く翼だった。白い服に白い肌、白い靴と白銀の長髪――そして異様な眼力を持つ黒い瞳。

「っ……!」

目が合った途端に息が苦しくなった。くず折れたユーティアを横目に、ノーアは言う。

「……彼女は渡しませんよ」

ノーアは身構えた。――翼を持つ人間は禁忌を犯した証。女神の封印した魔法を、何らかの方法で蘇らせたことを意味している。それはつまり、闇に身を売ったも同じだ。

「夜は闇の味方をする。いくら天才と呼ばれた君でも、この僕に勝てるとは思えないね」

挑戦的な声が辺りに響き渡る。

睨み合う二人の尋常でない空気を感じたメイリアスは、ただ廊下の隅へと後ずさった。

「グレイプニル・ノート」

先に攻撃を仕掛けたのはハティだった。細く透明な紐が散らばるガラス片を宙に浮かせ、ノア目掛けて投げ飛ばす。

「ウル・カノ」

灼熱の壁がそれらを一瞬で溶かし、二人の視線が交差した。

「ラティ・ノート」

「ギューフ・リントヴルム」

細かい石は赤い召喚竜に食いちぎられて姿を消すが、ハティに隙は出来なかった。

「ハガル！ ギューフ・フギン・ノート」

高速の鷹が背後からユーティアを狙う。

「ギューフ・ニースホツゲ」

緑の蛇が鷹を追い払い——ベルカナ・エーギル・ノート——黒い洪水が、ノアを遠くへ吹き飛ばす。

体勢を立て直し、ノアはすぐに顔をそちらへ向けて魔法を唱えた。

「ベルカナ・ロギ」

「エオー・ノート」

しかし火の粉は風にかき消されてしまった。——魔法の出現速度がまったく違う、やはり夜は闇の味方か。

「だから言ったでしょう？ 君じゃあ僕には勝てない」

と、ハティが倒れているユーティアへ近づく。

「ギューフ・フェンリル」

阻止しようとして召喚した幻獣も、——ハガル——再びハティはかき消した。

どんな抵抗も無駄のようだ。ノアは冷静に思考しようと両目を瞑る。

ハティが床へ跪き、ユーティアの頬へ恭しく触れた。

「ウル・レーヴァ」

光をまとった剣が目標を定め、ハティはそれを岩で押し留めようとした。

「ウル・スヴィティ」

前方を塞がれた剣は壊れ、その反動で岩も砕ける。二つの魔力が消える直前に、ノアは叫んだ。

「ギューフ・ウンディーネ！」

直後、水の上級精霊ウンディーネが現れた。散り散りになる白と黒の中を、美しい水の軌跡がハティへ向かう。再び同じことをしようとしたハティだったが、近づいてくる足音に気をとられた。

「ラーグ」「ガンダーlv・パス」

シルフの水滴がノアの魔法を増幅させ、それが身体を捕まえると同時に、ギユスターの美しい太刀捌きがその白い翼を切り落とす。

かろうじて自分の身は守られたが、右の翼が半分の大きさになっていた。

「ギューフ・フギン・ノート、ゲルギー——」

二つ目の呪文が言い終わる前にギユスターが剣を振り上げ、ユーティアをさらおうとする鷹をシルフが「ハガル」と、かき消す。

遅れてやってきたダリウスが、逃げ出そうとするハティに向かって矢を放ち、それをハティはギリギリで避ける。

「イス・ノート」

と、ハティはわずかにできた余裕で回復魔法を唱え、切られた翼を再生させた。

その光景に驚きながらも戦闘をやめない四人を、メイリアスは見ていた。——きっとこの戦いが終わったら、裏切り者と呼ばれるんだわ。ユーティアにも嫌われて、誰もがあたしを置いて行ってしまう……。

強力な魔法を使ったせいで力をなくしたノアは援護に回り、ギ

ユスターとダリウスが次々に攻撃を仕掛け、ユーティアの前に立ったシルフが隙を見て魔法を唱える。さすがのハティも相手の人数が増えてしまうと、先ほどの勢いをなくしたようだった。

それでも——それすらも予定の内だったのか——、ハティが唐突に強力な魔法を唱えた。

「ベルカナ・ゲルギヤ・ノート！」

濃い闇の気配が辺りを包み、無数の黒い鎖がノーアを襲い、ギユスターに向かい、シルフを狙って、ダリウスの身体を傷つける。

気づくと、廊下が赤い液体で汚れていた。メイリアスは目の前で起こっている事態の深刻さに気づき、恐怖に震えた。

ダリウスが床に両手を付いて痛みに耐える。——信じていると言ってくれた彼さえも裏切って、あたしはいつたい、何をしているの？ 恐ろしさの反動で足が勝手に床を蹴った。落ちていた弓を拾い、

彼の肩に触れる。

「大丈夫？ これくらいでやられてちゃ、軍人失格よ」

顔を上げたダリウスは驚いた。

「メイリアス……？」

彼女の両目には涙が溢れていた。

「ほら、しっかりしなさいよ。あなた、男でしょ？」

と、メイリアスが泣き笑いの顔になる。頷いたダリウスは立ち上がり、弓を受け取った。

一人で応戦していたギユスターに加勢すると、ハティがまた劣勢に追い込まれる。

「カノ、ウル・エオー」

「グローイ」

ノーアが熱風を送り、シルフが光を付加すると、それを避けようとしたハティに隙が出来る。

そして助走をつけることなく飛び上がったギユスターがほぼ真正面から、

「ノルズリ・パース」

と、水の渦巻く剣で白い身体を大きく斬りつけた。バランスを崩した身体に何本もの矢が放たれ、隙だらけになったハティにシルフがとどめを刺す。

「ウル・ゲルギヤ」

大きな鎖に動きを束縛されて、ようやくハティは大人しくなった。

それから怪我の治療を終えて戻ってきた四人が、メイリアスに顔を向ける。ベッドに寝かされているユーティアを背に、メイリアスは表情をこわばらせた。

「あなたが密偵だったんですね」

と、ノーアが第一声を発する。メイリアスは何も答えなかった。

「いつから密偵を？ それと理由を教えてください」

申し訳ない気持ちで胸を満たし、瞼が徐々に熱くなる。

「二月ほど、前から……彼らが、情報を買ってやるって、言うから」

静かな室内にメイリアスの涙声が響く。

「お金が、欲しかった、んです。故郷にいる、家族を……養うため、そして、借金を返すためでした。この城で侍女をしているのも、そのため……だけど、三ヶ月前に母が病気に倒れて……どうしても、お金が必要だったんです。そんな時に彼らが、情報を買ってやるって、持ちかけてきて……」

腕や腹に包帯を巻いたダリウスが何か考える様子で彼女を見つめていた。

「っ、ごめんなさい……こんなことのために、みなさんを、裏切って……あの子を危険な目に合わせて……本当に、ごめんなさい」

泣いて詫びるメイリアスに、誰も声をかけられない。貴族である自分たちには、貧しい彼女の気持ちなど、とうてい理解できなかった。

しかしただ一人、いつの間にか目を覚ましていたユーティアが優しい声で言った。

「——それなら、仕方ないと思います。わたしもメイリアスと同じ

立場なら、卑怯なこと、たくさんしちゃうと思うから」

ギユスターがすぐにユーティアへ寄り、ノーアが小さく唸る。

「ユーティア、もう平気なのか？」

「うん、大丈夫。……だからメイリアス、わたしはあなたを嫌いになんかならないし、憎みもしないわ。あなたにはあなたの事情があったんだもの、仕方ないことよ」

メイリアスの背中が震えた。俯いた顔からぽたぽたと涙が零れ落ちる。

「あ、あたし、あんなひどい、こと……したのに、どうして、ユーティア……？」

ゆっくりと上半身を起こすと、その首に掛かった赤い石が光を反射した。

「だってわたしたち、大事な友達だもの。裏切られたなんて思わないわ。ちゃんと、許しあわなくちゃ」

優しくすると、あまりにも温かすぎると思った。メイリアスがついに声を上げて泣き始め、ダリウスがそっとそばへ寄りそう。

「ユーティアがそう言うのなら仕方ありませんね。内密に処理しましょう」

と、ノーアは言った。すると、ダリウスがおもむろにメイリアスの肩を抱きしめた。

「なあ、メイリアス……」

彼女にしか聞こえないような声で言う。

「そんなに金が必要なら、オレのところに……嫁に来ないか？」

「っ、え……？」

メイリアスが顔を上げると、ダリウスが顔を赤くして言った。

「だから、お前の家族の分まで、オレが養うよ！」

その求婚は室内にいた全員の耳まで届き、視線が自然と二人に集まる。

「……っ、嫌なら、別に良いけどよ」

と、顔をそらしたダリウスにメイリアスは答えた。

「か、考え、とく……」
いつの間にか涙が止まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6640y/>

フリーアの娘

2011年11月23日15時15分発行